

TOTO

2019年 夏号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信



借景

Special Feature
Bringing
the
landscape
into the
house

特集

家の

まわりも

家の中



円通寺の縁側から、庭の垣根越しに比叡山が見える風景のように、昔から借景は、建築の質を上げてきた。それは現代の住宅にとっても同じだろう。周囲の景観を取り込めば、単体の魅力だけでなく、その土地の力を得た建築になるのではない。しかし、どこにでも借景たりうる豊かな自然があるわけではない。自然があったとしても、それを取り込むには工夫が必要なこともある。

一方で、街中だからといって内に閉じこもらない、開かれた住宅が求められている。せっかく開くのならば、借景を取り込みたい。では、何を借景と見立てるのか。山や海のみならず、空か、地面か、あるいは隣家の壁か。借景の力をあらためて振り返るとともに、その現代的な工夫に注目していく。

Case Study

1 Momoyama House

2 Sen

3 Todoroki House in Valley

4 Casa O

| | | |
|----------------------------|----------|----|
| 「桃山ハウス」 | 設計／中川エリカ | 4 |
| 「川」 | 設計／横内敏人 | 12 |
| 「Todoroki House in Valley」 | 設計／田根 剛 | 20 |
| 「Casa O」 | 設計／高橋一平 | 28 |
| | 文／橋本 純 | 36 |

シリーズ

| | | | |
|---------------------|-------------------------------------|------------------------|----|
| 旅のバスルーム108 | 文・スケッチ／浦 一也 | ホテル・ノックス(スロベニア・リュブリャナ) | 40 |
| 現代住宅併走44 | 文／藤森照信 | 「吉屋信子邸」設計／吉田五十八 | 42 |
| 最新水まわり物語50 | 成田国際空港第1ターミナル「experience TOTO」 | | 48 |
| TOTOギャラリー・間で展覧会をします | アーキテクテン・デ・ヴィルダール・ヴィンク・タュー展 | ヴァリエテ／アーキテクチャー／ディザイア | 52 |
| News File | TOTO News, Cera Trading News, Books | | 54 |

表紙／上から「桃山ハウス」「川」「Todoroki House in Valley」「Casa O」の借景。
表紙撮影／上から川辺明伸、傍島利浩、Yuna Yagi、桑田瑞穂。
編集制作／伏見編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所 印刷／ゼネラルアサヒ

借

まわりも
家の中

家の

Special Feature
Bringing
the
landscape
into the
house

特集

景

「桃山ハウス」の天井と、高窓から見える借景。

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 522
Summer 2019

- ケーススタディ1 山の木々も、家の一部
- ケーススタディ2 借景の柳と、坪庭のヒメシヤラの協奏
- ケーススタディ3 庭の木と、隣地の木の融合
- ケーススタディ4 隣家すらも、借景に
- コラム 借景論 緑ばかりが借景ではない

「TOTO通信」は
インターネットでも
ご覧いただけます。



<https://jp.toto.com/tototsushin>

Special Feature
Bringing the
landscape
into the house
Case Study

1

Momoyama House

作品

桃山ハウス

設計

中川エリカ



サンルームから北側を見る。家を囲むように設けられた高窓から、周囲の緑を見渡せる。

家の中の壁から切り離され、宙に浮いたような大屋根が架けられている。

屋根と壁の隙間からは、周囲の山の木々、そして空や海を望める。

まるで、環境と一体化したような住宅だ。



特集 / 借景 家のまわりも家の中 / ケーススタディ1

山の木々も、家の一部

曲がりくねる山道の途中、ヘアピンカーブのような急な曲がり道に囲まれた敷地に「桃山ハウス」はある。歴史ある温泉街の駅から山側に向かった造成地の一角。建主は都心にある住まいとの2拠点居住のため、また仕事柄お招きする客人をもてなすゲストハウスとして土地を購入。中川エリカさんが前職で担当した物件に建主が興味をもったことから、設計を依頼した。購入時、古屋はすでに解体撤去されていたが、植栽や庭、また敷地を巡る高い塀は残されたままであったという。

Special Feature
Bringing the landscape into the house
Case Study

1

Momoyama House



北側の高窓から外を見る。視線が抜けるように一部の柱を丸くしている。外では借景の山桜の花が咲いている。

山の一部分のような家を目指した

「家のどこにいても海と山の両方を感じられるようにしたい」というのが、建主の希

望であった。山を切りくずしてつくられた敷地からは、歴史ある温泉街とその向こうに広がる海が眺められる。敷地のまわりには企業の保養所として使われていた建物が点在し、木々のあいだに見え隠れする。中

川さんは敷地を訪れた際、これら固有の要素が織りなす情景に着目した。「隙間からスキが生え出た擁壁、隣に見える陶芸窯のコンクリートの煙突、敷地をぐるりと囲う塀など、人が山と格闘しながらつくったものが残り、印象的でした。こうした街の来歴を価値として引き継ぎ、これからつくる新築の建物に重ねることができないかと考えたのです」と語る。

中川さんは敷地内に残されていた花木、石や岩、門柱や門扉をそのまま残すことを決める。そして、道路との境界線に立つ既



テラスから見た室内の全景。高さ2,100~2,500mmの家具群に、天井高4,500mmほどの大屋根を架けている。



キッチンから外を見る。庭の木の後ろには山の雑木林が見える。大きな庭木は敷地にもともと立っていたクスノキ。







サンルームから南側を見る。前庭と室内の床仕上げを統一し、内外の境をあいまいにしている。

存の塀や擁壁も残し、外壁のように扱うことにした。「高い塀でプライバシーは守られているので、後は屋根を架ければ建築になるたはずまいをしていた」と言う中川さんは、薄い板のような屋根を、敷地を覆うように架けることに。この際に中川さんは、塀の向こう側にある山の木々もひとつくくりで庭として扱えるよう、屋根の高さと形状について検討した。「周辺環境を拡大解釈することで、室内で木々を感じるだけでなく、『山のような家』ができるのではないかと思いました。20分の1という大きな模型をつくってはのぞいて、室内から見えるものとは外から入る光の入り方を確認しながら、身体的にスタディしていきました」と中川さん。そうして決まった屋根の高さは、地上から5m弱の位置。室内からの視線とともに周囲を巡る塀の形状にも呼応させた結果、北の山側の屋根はカーブし、開けた南の海

側は直線状に。全体としては食パンのような形となった。エントランス部分では駐車スペースを兼ねた待合に円形の屋根をもう一枚設け、屋根が連なるように。屋根の北側にあたる場所には離れを設け、茶室としても使えるゲストルームとしている。

生活の領域とからみあう構造

屋根の下には建主が必要とするモノや設備を置きながら、生活の領域を検討し、プランを定めていった。視界の開けた海側には大きなソファにに応じて大きなスペース、木々に囲まれた山側には就寝や入浴のためにコンパクトで親密な空間が配され、互いのスケール感はグラデーション状に連続させている。家具や壁で囲われたスペースにはトイレを含めてほとんど天井はない。室



写真上／離れ。茶室として使うため、炉や床がある。下／寝室。家全体は開放的だが、個室は分節されている。



Special Feature
Bringing the landscape into the house
Case Study

1

Momoyama House



俯瞰。敷地は既存のブロック塀に囲われ、プライバシーは確保されている。

なお、庭には新しい植栽を元からある花木につなぐように植えることで、次第に一体として見えるように意図されている。とくに北側の庭では塀に沿ってもともと垂直緑化が工夫してつくられていたため、新たに足元なじむように植栽していった。またコンクリートの柱の表面は、型枠にラワン合板を割いた板を用いることで縦の筋を

周辺環境に 溶け込んでいる

内のどこにいても空間には一体感があり、高く持ち上げられた屋根と壁とのあいだのガラスを通して視線が外に抜け、周囲の緑を感じられる。春には、軒先と塀の向こうに山桜がのぞく。

屋根を支えるRC造の柱も、生活の領域に合わせてながら建てられた。鉄板とフラットバーを工場溶接して製作した屋根のパネルは約1800mm四方で、柱はそのグリットにのりながら自由に配置されている。柱の本数は、室内と軒下の半屋外に6本、外に8本。屋外の柱には、屋根からフラットバーを延長させて互いをピン接合した。なるべく建物の外へ外へ、内側から外側へと発散するように柱が配されることで、室内の領域は庭の領域ともあいまいなものになった。そして、室内から見通せる場所にある柱は円柱とし、視線を受け流すように配慮。角がないことで境界を越えていく心理的な効果があり、庭や山の緑も混ざって感じられるようになった」と中川さんは効果を語る。



エントランス。右手の円形の屋根は駐車スペースを兼ねた待合。奥の塀の緑は、既存。もともと緑化されていた。



エントランスからアプローチを見る。左奥の前庭に進み、サンルーム側から家に入る。右手には離れがある。

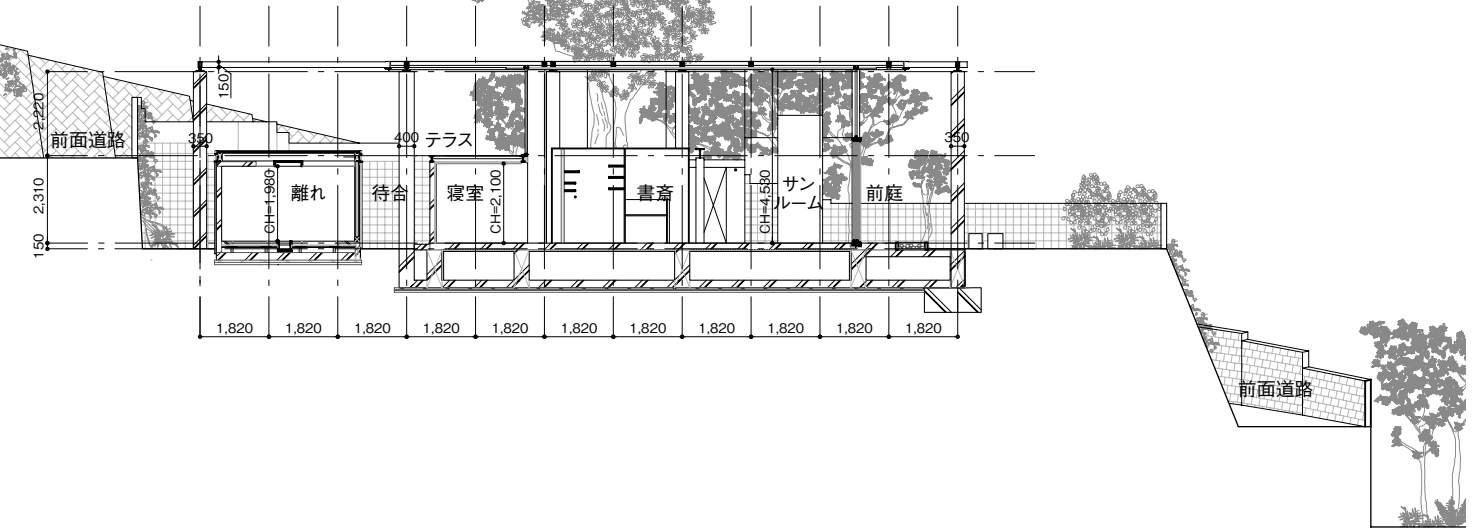
入れたあらいテクスチャとし、既存の塀、また門柱や門扉、ポストなどがもつ存在感に寄せている。室内の柱の足元の一部にはモザイクタイルを貼り、敷地周辺にある人工物の面影との連続を思わせる。一方で、室内の床面は床版コンクリートを磨いた仕上げ、フラットな天井はツヤのある白塗装として、光や緑をやわらかにバウンドさせて室内へと導いている。

新築時から周辺環境や地形を建物自体の構成や細部にまで取り込み、時を経るごとにますます周囲と一体化させるよう意図された家。この家や庭に身を置いて過ごす人は、建物の内と外という枠組みを飛びこえ、自分が外の山の一部であるような心持ちにさせられる。

断面図

0 1 2m

1/200



平面図

0 1 2m

1/200





正面外観。

「桃山ハウス」

建築概要

| | |
|------|------------------------|
| 所在地 | 静岡県 |
| 主要用途 | 専用住宅、ゲストハウス |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 中川エリカ/中川エリカ建築設計事務所 |
| 構造設計 | ストラクチャードエンバイロメント |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造、 一部鉄骨造、木造 |
| 施工 | 箱根建設 |
| 階数 | 地上1階 |
| 敷地面積 | 458.17㎡ |
| 建築面積 | 212.59㎡ |
| 延床面積 | 142.33㎡ |
| 設計期間 | 2014年1月～2016年3月 |
| 工事期間 | 2016年4月～12月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|--|
| 屋根 | ゴムシート防水 |
| 壁 | RC 打放し 撥水剤塗布、 アコヤサイディング 外部木部用塗装、タイル貼り、 GS パネル貼り |
| 開口部 | 鋼製サッシ、アルミサッシ |

おもな内部仕上げ

| | |
|-------|---------------------------------|
| サンルーム | |
| 床 | コンクリートスラブ研磨 表面強化剤仕上げ |
| 壁 | PB AEP |
| 天井 | PB2枚貼り AEP 全ツヤ |
| 離れ | |
| 床 | 畳 |
| 壁 | コンクリート打放し 撥水剤塗布、 シナ合板 ウレタン塗装 |
| 天井 | シナ合板 ウレタン塗装 |



中川エリカ
Nakagawa Erika

なかがわ・えりか/1983年東京都生まれ。2005年横浜国立大学工学部建築学科卒業。07年東京藝術大学大学院美術研究科修了。07～14年オンデザイン。14年中川エリカ建築設計事務所設立。14～16年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手。おもな作品=「ヨコハマアパートメント」(09、オンデザインと共同設計)、「ライゾマティクス新オフィス移転計画」(15)、「塔とオノマトペ」(18、展示作品)。



動画をご覧
いただけます

Check!



<https://mccr.com/otosushin>



Special Feature
Bringing the
landscape
into the house
Case Study

2

Sen

作品

川 せん

設計

横内敏人

京都の白川沿いは、柳などの並木道になっている。
その白川沿いに横内氏は、3棟の建築を改修。当然、並木を生かすように借景を取り込んだ。
切り取られた借景が、白川の風情を際立たせている。



2階のリビングから白川沿いの柳を見る。掛込み天井により天井高がおさえられ、外に流れる白川に意識が向く造りになっている。

特集 / 借景 家のまわりも家の中 / ケーススタディ2

借景の柳と、坪庭のヒメシャラの協奏

京都の白川。源流がある東山の花崗岩が川の流れて削られて、白い砂として川底に堆積することからこの名が付いた。この砂は、白砂として枯山水にも使われてきた。京都の風景は、こうした自然によって支えられてきた。横内敏人さんが手がけたゲストハウス「川」は、この白川に沿って立つ。

白川を借景とした料理屋とゲストハウス

白川の下流に祇園がある。川沿いに料亭が立ち並ぶ風景は、有数の観光名所である。しかし、「川」の立つ少し上流は、環境整備がいまだ十分とはいえない。事実、「川」の前は抜け道であり、タクシーや商業車が絶えまない。

この現状を変えたいというオーナーからの依頼を受け横内さんは、料理屋「丹」と、ゲストハウス「川」を手がけた。

この並んだ2軒はともに同じオーナーで、京都で日本料理屋を営んでいる。同じく京都に事務所を構える横内さんとは昔から親交があった。先に手がけた「丹」は敷居の高い懷石料理を、若い人にも楽しんでほしいという想いから、あえて朝と昼だけの営業にしほり、価格をおさえた。横内さんは家に招かれたような感覚で、食事を楽しむ空間にしてはどうかと考え、巨木のビニング材を使った大きなテーブルをつくった。そこでは見知らぬ客同士もともに食事をする。このテーブルは白川に向かって伸び、川沿いのドアや窓はすべて開放することができる。まるで外にテーブルを出して食事を

している感覚をもつ(17ページ)。

次にオーナーと取り組んだのがゲストハウス「川」の設計であった。遠方から訪ねてくる客も多く、食事だけで終わらない、もてなしができないかと考えた。そこで使われていない隣の建物を借り、改修することに決めた。ただ、遠くを眺めるのではなく、白川の風景はすぐ前に広がっているので、プライバシーとの両立が課題となった。これに対し、高さによる視線の誘導と窓からの距離により、白川を借景として取り込むことに成功している。

2階のダイニング。1階の坪庭に植えられたヒメシヤラの背は高く、2階まで届いている。



Special Feature
Bringing the
landscape
into
the house
Case Study

2

Sen



1階のベッドルーム。公道側をオープンにできないベッドルームは、坪庭側が開放的な造り。



1階の浴室。坪庭に面している。坪庭は高い壁に囲われ、プライバシーが確保されている。



柳とヒメシヤラ、ふたつの高木

白川の風景をつくっているのは、川のせせらぎとともに、垂れる柳の木だ。この背の高い柳の木を楽しむために、2階にリビングを設けることを提案した。ふつうであれば道から離れた2階にベッドルームを配置する。しかし、せっかくなので外部に開放できる2階をリビングとし、逆に1階では道に対して壁で視線を防ぎ、天井ぎりぎりの上方に窓を設け、柳を楽しめるように

した。

こうして道からの視線はさえぎったが、課題が残されていた。白川とは反対側の奥にも住宅が立て込んでいたのである。この奥をどうするかが勝負どころだと、横内さんは当初から感じていたと言う。奥に高い塀を建て、外からの視界を完全に閉じることにしたが、そうするとプライバシーは保たれる半面、閉鎖的な場所になりかねない。そこで、この坪庭に高木のヒメシヤラを植えた。2階にも、ゆうに届くこの木は視線を上へと向けさせてくれ、閉鎖性を感じさせない。さらに、葉が茂る2階では季節になれば開花を楽しむこともできる。また塀で閉じたことでこの坪庭に面した開放的な浴室をつくることもできた。さて2階に上がれば一変して開放的な空間が広がる。海外からのゲストも多いので椅子座としたがリビングは一段床を下げた。視線を低くさせることで、畳に座ったときのような日本の住空間をイメージさせる。

リビングからは、白川と柳の並ぶ姿が一望できる。一方、奥のダイニングからこの窓を見ると風景は一変し、まるで柳が緑のカートンのように窓一面を覆う。窓からの距離、そこに借景のつくり方のふたつ目のヒントがある。

額縁ではなく、フレイミング

借景は、絵画とは違う。見える風景の切り取られ方は、その窓からどれだけ離れて見るかにより大きく変わる。近寄れば広角



Sen / Yokouchi Toshihito





Sen / Yokouchi Toshimoto



2階のリビング。障子や掛込み天井などの茶室のような意匠だが、椅子座のため、床レベルを下げてスケール感を調整している。

Special Feature
Bringing the landscape
into the house
Case Study

2

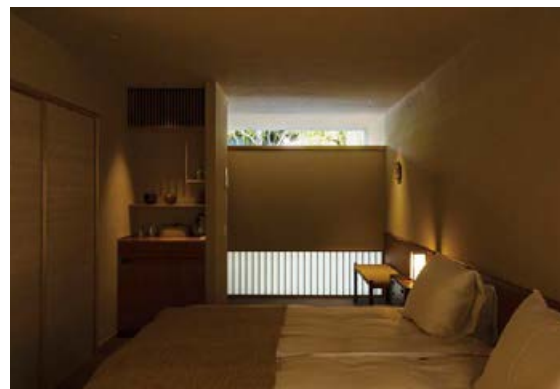
Sen

借景は、 自然のコントロール

横内さんは最近、「川」から少しだけ上流にある白川沿いのマンションの改修も手がけた。川からみて奥に位置する浴室からも白川を楽しめるよう、リビング越しに外が見えるよう、ペランダまでガラスで視線の通り道をつくった。向かいからの視線も気

に、遠ざかれば狭くカメラのズームのように変化する。窓から見える風景はこうした平面の操作によっても「借景」となるのだ。
視線をこの窓に集める仕掛けもある。じつはテレビが隠されている戸棚は窓に向かって取り付けられ、リビングの天井は窓に向かって勾配をもった掛込み天井となり、視線を窓に集める。このダイニング側の天井面との取り合いには、エアコンの吹出し口が隠され、非日常の空間をじゃましない、こまやかな配慮もなされている。

にならない部屋であったため、ここでは大胆にガラス窓を設けることができた。
横内さんは言う。「自然は本来荒々しいものです。そのままでは、人は耐えられませんが。だからこそ取り込み方を考える必要があるんです」。自然を切り取る借景は、建築家による自然のコントロールでもある。この白川をさらに上れば銀閣寺にたどり着く。そこは書院造の形式が生まれた場所でもある。ここでは障子を細く開け、外に広がる自然を掛け軸のように見立てて楽しんだ。この白川では室町時代からずっと自然の取り込み方について考えてきた。その歴史が「川」にも流れている。



1階のベッドルーム。プライバシー確保のため、人通りの多い公道側は開いていないが、高窓から白川沿いの柳を見ることができるようになっている。

白川沿いの家

設計 横内敏人
竣工 2018年



リビングからベランダ越しに白川沿いの並木を見る。



洗面所からも並木が見える。

白川沿いに立つマンションの1住戸のリノベーション。もともと2LDKだったが、夫婦ふたりが住むためにオープンな1室空間に改修した。リビングからは目の前に流れる白川沿いの並木を見ることができる。寝室からもガラリ付きの引き戸、浴室や洗面所からもガラス越しに緑が見えるようになっている。

Tan

丹

設計 横内敏人
竣工 2016年



1階。大きなブビンガ材のテーブルを囲むように客席を配置している。



2階。窓に接して取り付けられたカウンターテーブル。

「川」の隣に立っている料理屋。「川」と同じオーナーが所有している。木造の既存家屋を改修したもの。白川沿いの風情を感じられるように、1階からも2階からも、開口部いっぱい柳を見ることができる。また季節の許す限り、開口部を開け放して使用している。

—
そのほかの白川沿いの建物
—

平面図(改修後)



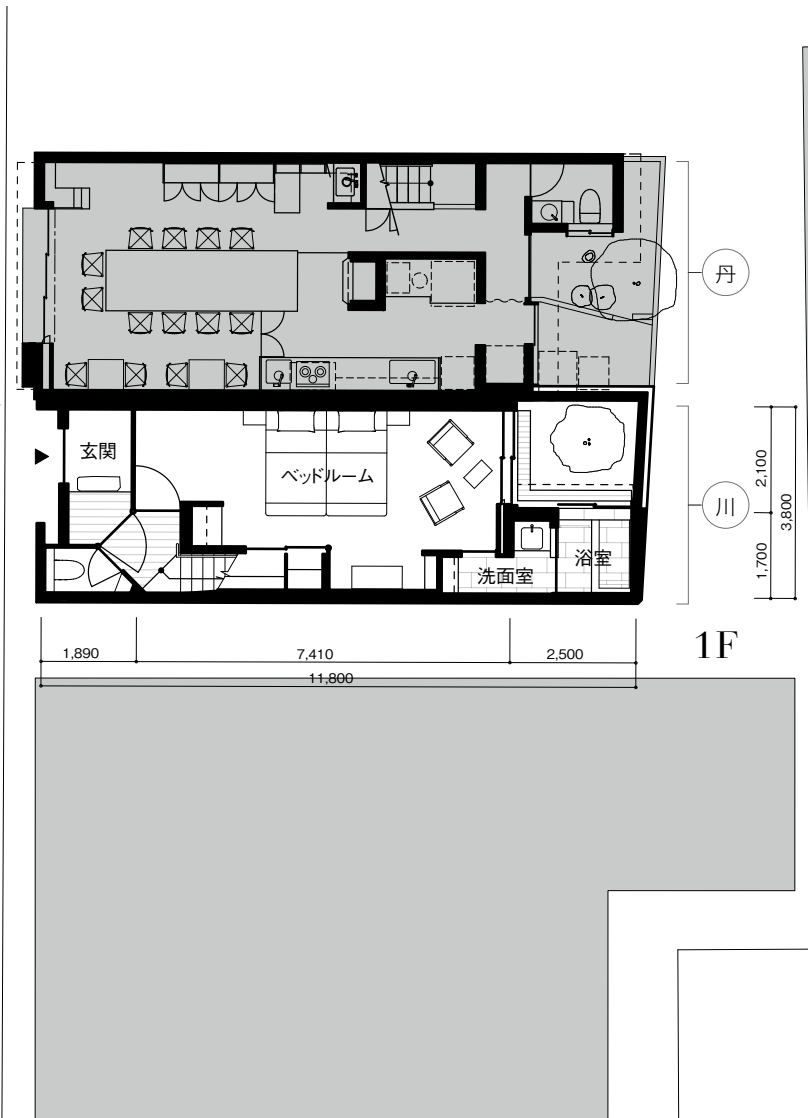
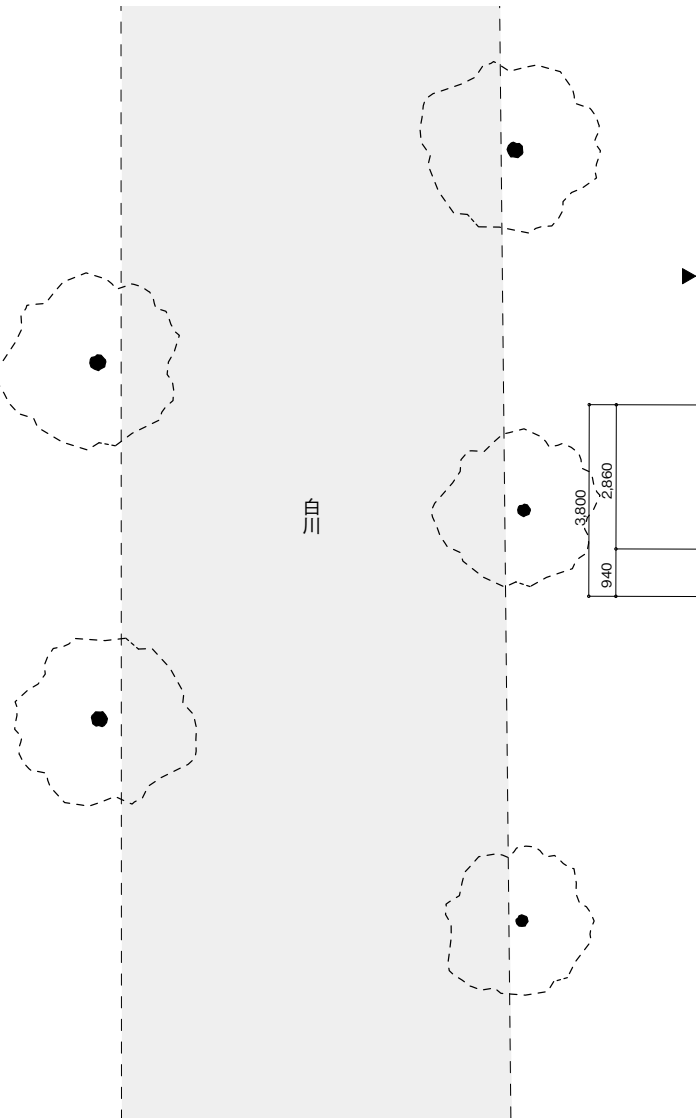
「川」の玄関。室内から柳が見えるように、扉上部の小壁部分はガラス張りになっている。



0 1 2m
1/150



2F



1F



白川沿いに立つ「川」(右)と「丹」(左)。

せん 「川」

建築概要

| | |
|------|--------------------|
| 所在地 | 京都市東山区 |
| 主要用途 | ゲストハウス |
| 設計 | 横内敏人 / 横内敏人建築設計事務所 |
| 構造 | 木造 |
| 施工 | 上原工務店 |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 50.54㎡ |
| 建築面積 | 38.15㎡ |
| 延床面積 | 73.30㎡ |
| 設計期間 | 2016年11月～2017年2月 |
| 工事期間 | 2017年3月～7月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|--------------------------------------|
| 屋根 | 既存瓦屋根補修、 カラーガルバリウム鋼板 壁はげ葺き(下屋) |
| 壁 | 珪藻土仕上材 |
| 開口部 | 木製建具 |

おもな内部仕上げ

| | |
|------------|--|
| ベッドルーム | |
| 床 | カーペット敷き |
| 壁・天井 | 珪藻土仕上材 |
| リビング | |
| 床 | サイザルカーペット敷き |
| 壁 | 珪藻土仕上材 |
| 天井 | 掛込み天井(よしベニヤ突付張り) 垂木:白竹元口 φ=50mm 押縁:女竹元口4分2本組 |
| ダイニング・キッチン | |
| 床 | ブラックチェリー 3層フローリング t=15mm |
| 壁 | 珪藻土仕上材 |
| 天井 | 平天井(よしベニヤ突付張り) 押縁:女竹元口4分2本組 |



横内敏人

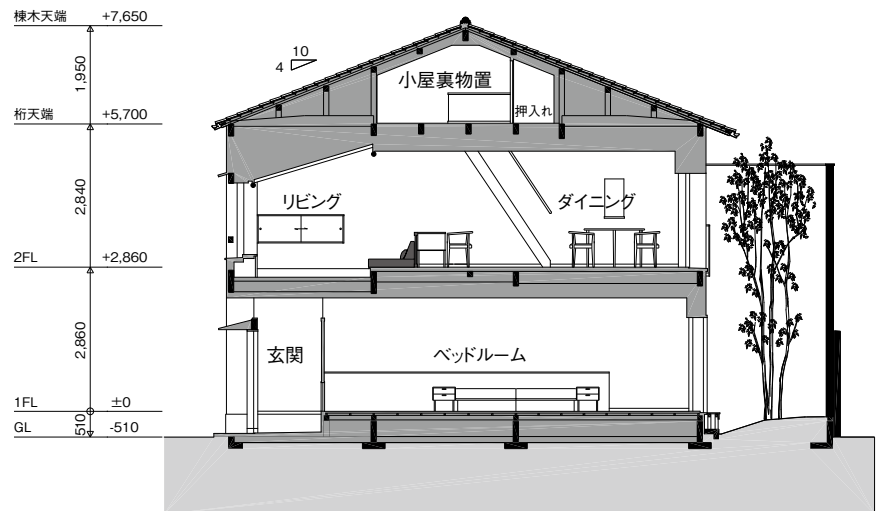
Yokouchi Toshihito

よこうち・としひと / 1954年山梨県生まれ。78年東京藝術大学美術学部建築科卒業。80年マサチューセッツ工科大学大学院修士課程修了後、前川國男建築設計事務所などを経て、91年横内敏人建築設計事務所設立。同年京都造形芸術大学専任講師。その後、助教授、教授などを経て、現在特任教授。おもな作品=「若王子の家」(92)、「三方町縄文博物館」(2000)、「若王子のゲストハウス」(02)など。

断面図

0 1 2m

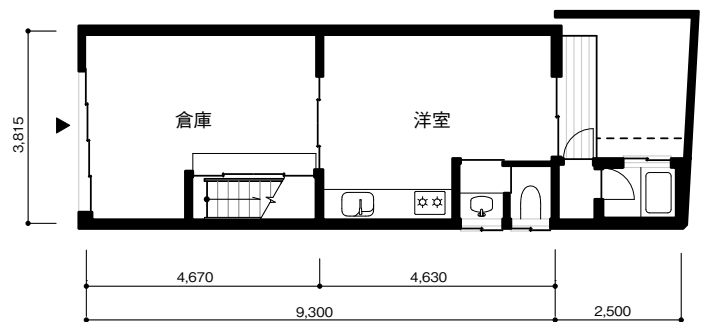
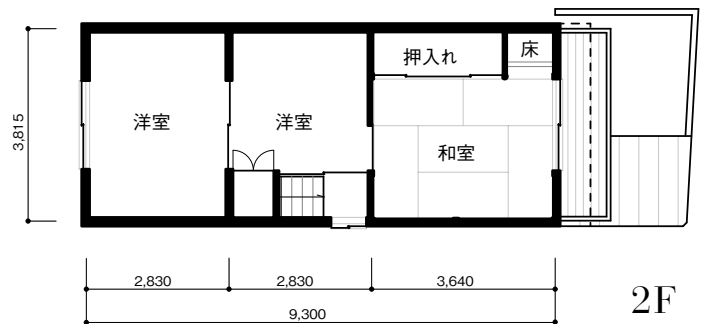
1/150



平面図(改修前)

0 1 2m

1/150



1F

Special Feature
Bringing the
landscape
into the house
Case Study

3

Todoroki
House
in Valley

作品

Todoroki
House
in Valley

設計

田根 剛



まるでジャングルの中に建てられたような都市住宅。
奥行き2mしかない庭は、隣家の木々と融合している。
リビング・ダイニングからは世界各地の樹種が見渡せるようになった。



1階のLDKから南側の庭を見る。手前のシャクナゲやナギなどは庭木。奥の樹木は隣地の借景。

特集 / 借景 家のまわりも家の中 / ケーススタディ3

庭の木と、隣地の木の融合



北東側から見た外観。右手の等々力溪谷公園沿いに立っている。左手の緑は庭木。

Special Feature
Bringing the
landscape
into
the house
Case Study

3

Todoroki
House
in Valley



1階のガラス張りのポリュームの上に、2～3階の木製サイディングのポリュームがのっているような構成。

「Todoroki House in Valley」。窓いっぱい緑。作品名と写真から、等々力溪谷の森を想像した人は、すでに建築家の術中にある。

確かに、地形的にみればこの家は溪谷の中腹に位置している。しかし、森の中ではない。昭和期に開発された分譲地の私道の先。敷地の広さも50坪ほどで、外壁から敷地境界線までは2mもない。家が西側にやや寄っているが、これも大通りが近い証拠。敷地に入り込む防火地区をぎりぎり避けた結果だ。都心部にあつて、決して稀有な敷地ではないのに、まるで森の中に見えるように見える。

設計を手がけたのは、パリに事務所を構える建築家・田根剛さん。建主は著名な造園家である。当然庭は建主が手がけた。彼らはいったいどんな術を用いたのか。

設計のテーマは「湿潤」と「乾燥」

田根さんは自らの設計手法を「考古学的リサーチ」と呼ぶ。普通、等々力溪谷で家を設計するなら、その溪谷について調べる。しかし田根さんは、そこで得たキーワードをあらゆる時代、場所へと広げて調査する。今回のキーワードは「dry」と「wet」。

自然とは酷なもので、宅地開発しようが、地面は溪谷のそばでジメジメしている。しかし、上空にはいつも風が吹き、ざわざわと木々を揺らす。地面が「wet」で、上空が「dry」だ。このキーワードから、世界中の湿潤な地域、乾燥した地域の原始的な民家や集落などを調査し、それを再びこの地で合流させた。この家の下部が幾何学的で開放的な姿をしていること、上部が有機的でぼつぼつと窓をあける閉鎖的な姿をしていることは、この手法に由来する。

大きな世界へと意識が広がる

部屋の配置をみると、1階はリビング・ダイニングで、北側に書斎、その上の中2階に玄関がある。これが「wet」の下部。「dry」の上部は2階が寝室と浴室、3階が子ども室（寝室2）。北側斜線の影響で浴室の上は屋上に、子ども室の屋根も段々になっている。

上部のポリュームは、下部のコの字の壁が9割以上の荷重を負担している。構造は木造だが、一部鉄骨を用いて補強し、南側にある2枚の壁柱は、ほぼ水平力を負担するだけの存在である。この構造が、下部の大開口を生み出している。平面図を見てほ



Todoroki House in Valley / Tane Tsuyoshi

しい(26ページ)。南側2枚の壁柱はやや斜めに配置されている。これは、大開口の連続性、室内外の連続性をじゃましないようにした工夫である。

田根さんは「1階は、土地そのものを身近に感じられるよう、1mほど床を下げました。地面が近くなり、風に揺れる植物や、そこで暮らす虫たちの様子がよく見えます。緑を背景に黄色や白の蝶が飛び、窓いっばいに道を描いていく光景はすてきですよ。立地上、渓谷は望めませんが、その存在は強く感じられます」と話す。3階の窓からは渓谷の緑、その先に都心の高層ビル、もっと先には富士山も見える。そして空。どの方角にも窓があるため、眺望に加えて通風も申し分ない。渓谷の存在を感じつつ、上の階へ上がるほど、より大きな世界へと意識が広がっていくようだ。

隣家の木々を 取り込む庭

富士山が見えることから、庭の東側には富士山の溶岩が置かれている。その付近には、シタなど湿潤な場所に生える植物。そして西へ行くほど、乾燥した場所に生える植物が植えられている。「お施主さんも設計

のコンセプトをおもしろがってくれました。朝日が射す東側は湿潤な状態になり、西側は強い夕日を受けて乾燥した状態になります」と田根さんは説明する。建築は上下、庭は東西で、「dry」と「wet」のコンセプトが展開しているのだ。

とはいえ、外壁から敷地境界線までの庭のスペースは2mもないというのに、この緑の奥行きはどういうことか。「じつは、見えている緑の半分は敷地外のものなんです。周囲の民家は思い思いの木を植えていて、ヤシの木も見られます。お施主さんは50種類以上の植物を駆使して、敷地内外の緑の一体化を図りました」。驚くべき借景の術である。

借景を生かす ディテール

こうして奥行きのある緑が、リビングに飛び込んでくる。それを強調しているのは、

1階のLDKを庭から見る。床レベルが庭より1,000mmほど下げられ、地中に埋まっている。



Special Feature
Bringing the
landscape
into
the house
Case Study

3

Todoroki
House
in Valley

オイルステインの木部をベースに整えられた、落ち着いた室内の色彩・素材である。鉄部も濃く茶系でまとめた。壁は地面を掘って出た土を使って左官仕上げに。なるほど、庭の土や緑とマッチしないはずがない。唯一明るいのは焼成石の床。焼き加減は3度調整した。「昼もいいですが、本当にいいのは夜です。床などに月の光が射し込み、木々のざわめきとともに、その影がゆらぎます。夜の木漏れ日ですね」。建主は田根さんにそう語っているようだ。

田根さんは、色彩や素材へのこだわりを次のように話す。「私は、空間ではなく場所をつくりたいと考えています。空間というものには、材料がなんであれ、寸法やスケールを根拠にどこでも生まれまます。しかし、場所には質感が必要です。近代建築は世界中どこでも同じ空間をつくらうとしました。これからは、土地を強く意識しながら、ここにしかない場所を目指すべきだと考えて

います」と。

確かに、近代の建築家たちは建物と地面を切り離そうとした。たとえば吉村順三の「軽井沢の山荘(1962)。地面の湿気を避けて、木造の居室をコンクリートで持ち上げていた。言ってみれば下が「dry」で上が「wet」だ。

一方で、この家は逆だ。地面は湿気が多いから、湿気が多い地域から学ぼう。上空は風がつけねに吹く場所だから乾燥した地域から学ぼう。それをひとつにまとめあげた術が、等々力渓谷の豊かな自然を私たちに想像させたのだから、広義の借景にちがいない。

「人間は、その風土と一体になって、よりよく生きるために、力の限り、自由に、感じ、考え、行動する」。吉村と東京藝術大学の同僚だった山本学治が、和辻哲郎の『風土』を解説してこんな一文を記していた。私たちは、風土ということを忘れていないか。世界中から知恵を借りられる現代であればこそ、よりその土地らしい住まいが創造できるのだ。そんなことを、この作品は語りかけているように思う。

西側外観。窓からはジャングルの中に住んでいるように見えるが、実際は住宅街の一画に立つ。





Todoroki House in Valley / Tane Tsuyoshi



3階。窓からは木の天辺と空が見える。樹木の上から見たような風景が広がる。



2階。窓からは庭の木々が見える。まるで森の中で眠るような感覚になる寝室。

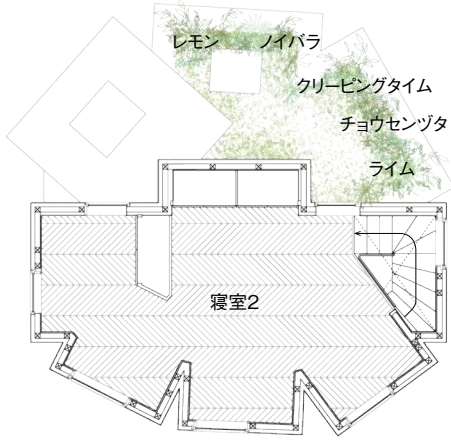


平面図

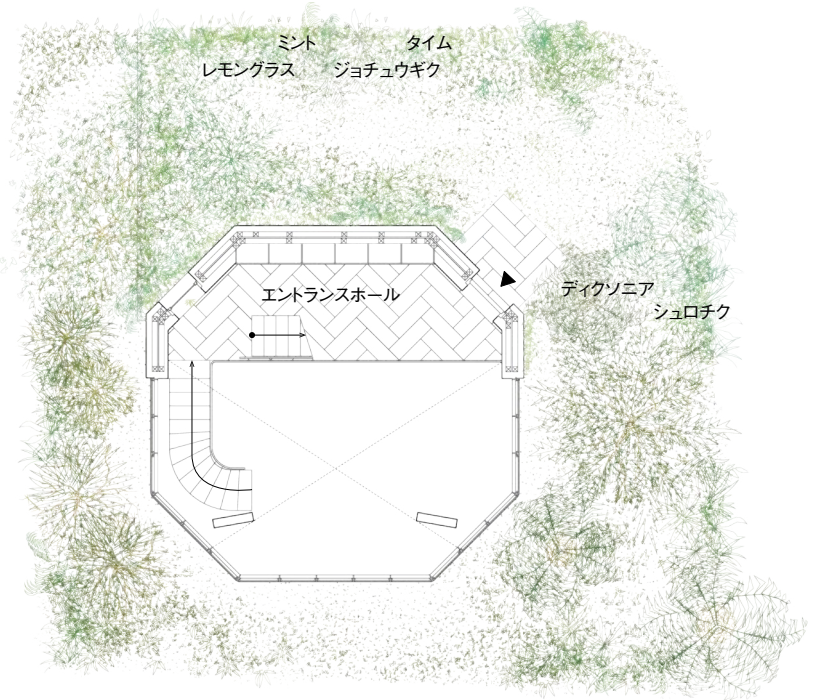


0 1 2m

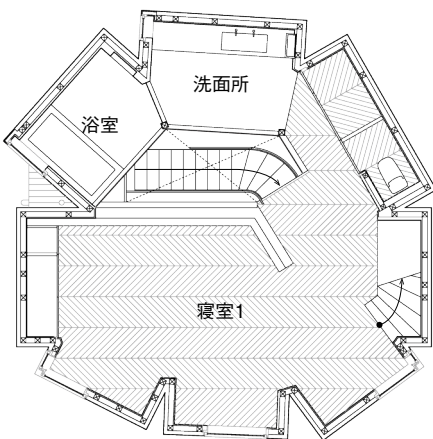
1/200



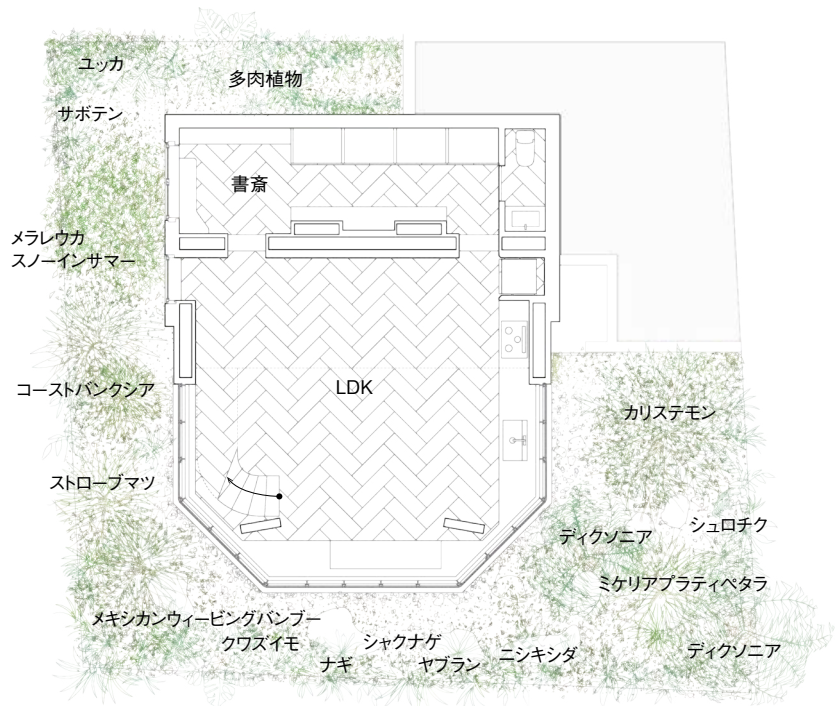
3F



1.5F



2F



1F



南東側から見た夕景。

「Todoroki House in Valley」

建築概要

| | |
|------|--|
| 所在地 | 東京都世田谷区 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども2人+祖母 |
| 設計 | 田根 剛 / Atelier Tsuyoshi Tane Architects |
| 構造設計 | yasuhirokaneda STRUCTURE |
| 構造 | 木造在来工法 |
| 施工 | 栄港建設 |
| 階数 | 地上3階 |
| 敷地面積 | 174.86㎡ |
| 建築面積 | 69.64㎡ |
| 延床面積 | 167.11㎡ |
| 設計期間 | 2016年1月～2017年8月 |
| 工事期間 | 2017年9月～2018年4月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|-----------------------------|
| 屋根 | ガルバリウム鋼板 |
| 壁 | 土壁掻き落とし、 ウェスタンレッドシダー下見張り |
| 開口部 | スチールサッシ、木製建具 |

おもな内部仕上げ

| | |
|-------|--------------------------|
| LDK | |
| 床 | 焼成石荒ざり仕上げ、 ヘリンボーン張り |
| 壁 | 土壁掻き落とし |
| 天井 | ウェスタンレッドシダーパネリング |
| 寝室1・2 | |
| 床 | 無垢フローリング フレンチヘリンボーン張り |
| 壁 | PB EP |
| 天井 | インテリアラーチ |



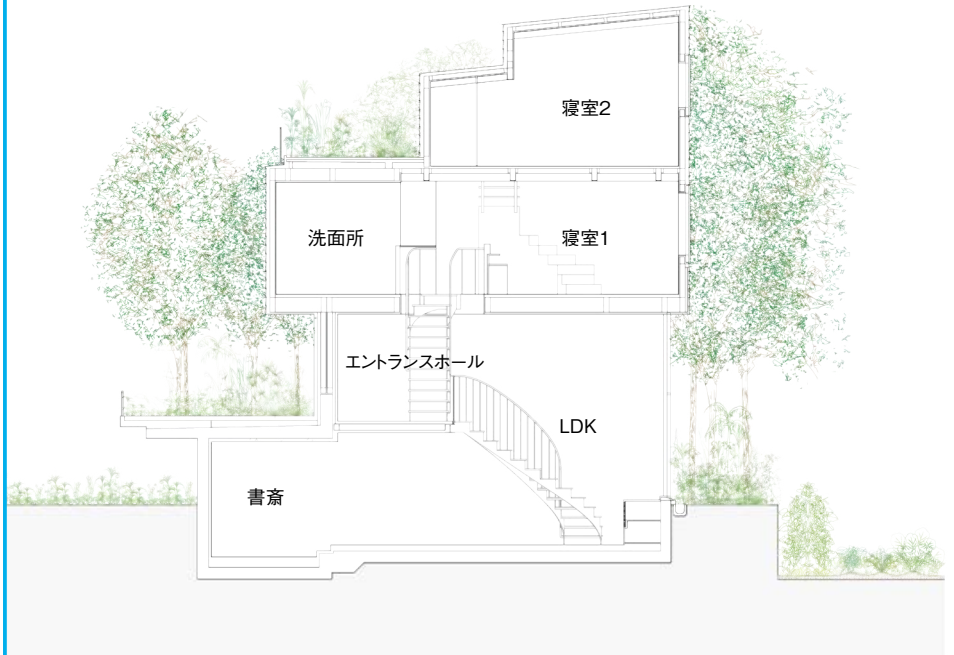
田根 剛
Tane Tsuyoshi

たね・つよし / 1979年東京都生まれ。Atelier Tsuyoshi Tane Architectsを設立、フランス・パリを拠点に活動。おもな作品に『新国立競技場・古墳スタジアム(案)』(2012)、『LIGHT is TIME』(14)、『エストニア国立博物館』(16)、『(仮称)弘前市芸術文化施設』(2017-)など。フランス文化庁新進建築家賞、第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞、ミース・ファン・デル・ローエ欧州賞2017ノミネート、アーキテクト・オブ・ザ・イヤー2019など受賞多数。2012年よりコロンビア大学GSAPPで教鞭をとる。

断面図

0 1 2m

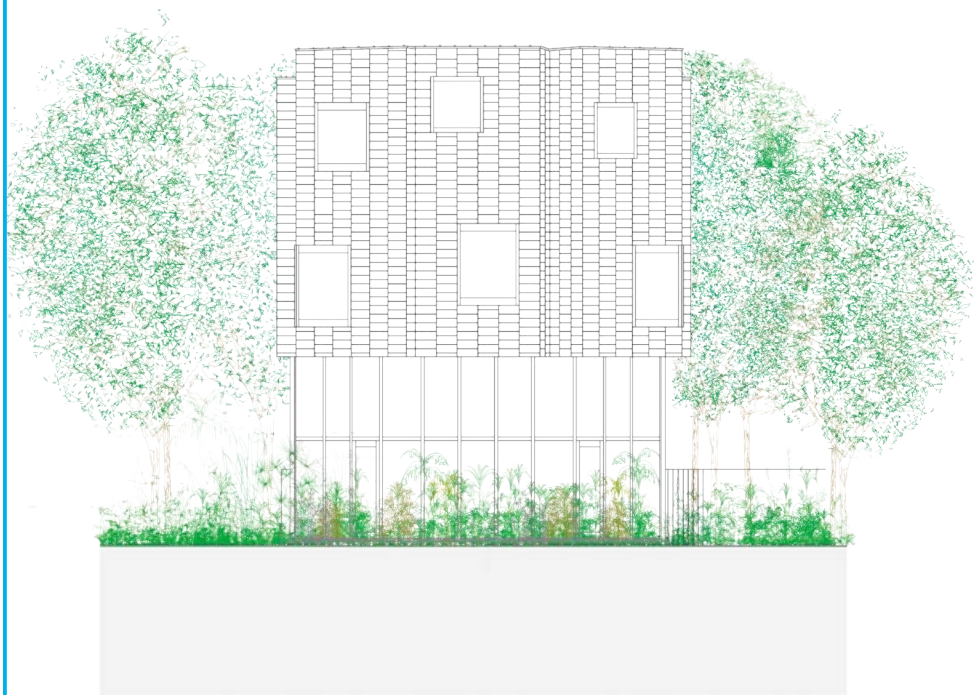
1/150



南立面図

0 1 2m

1/150



Special Feature
Bringing the
landscape
into the house
Case Study

4

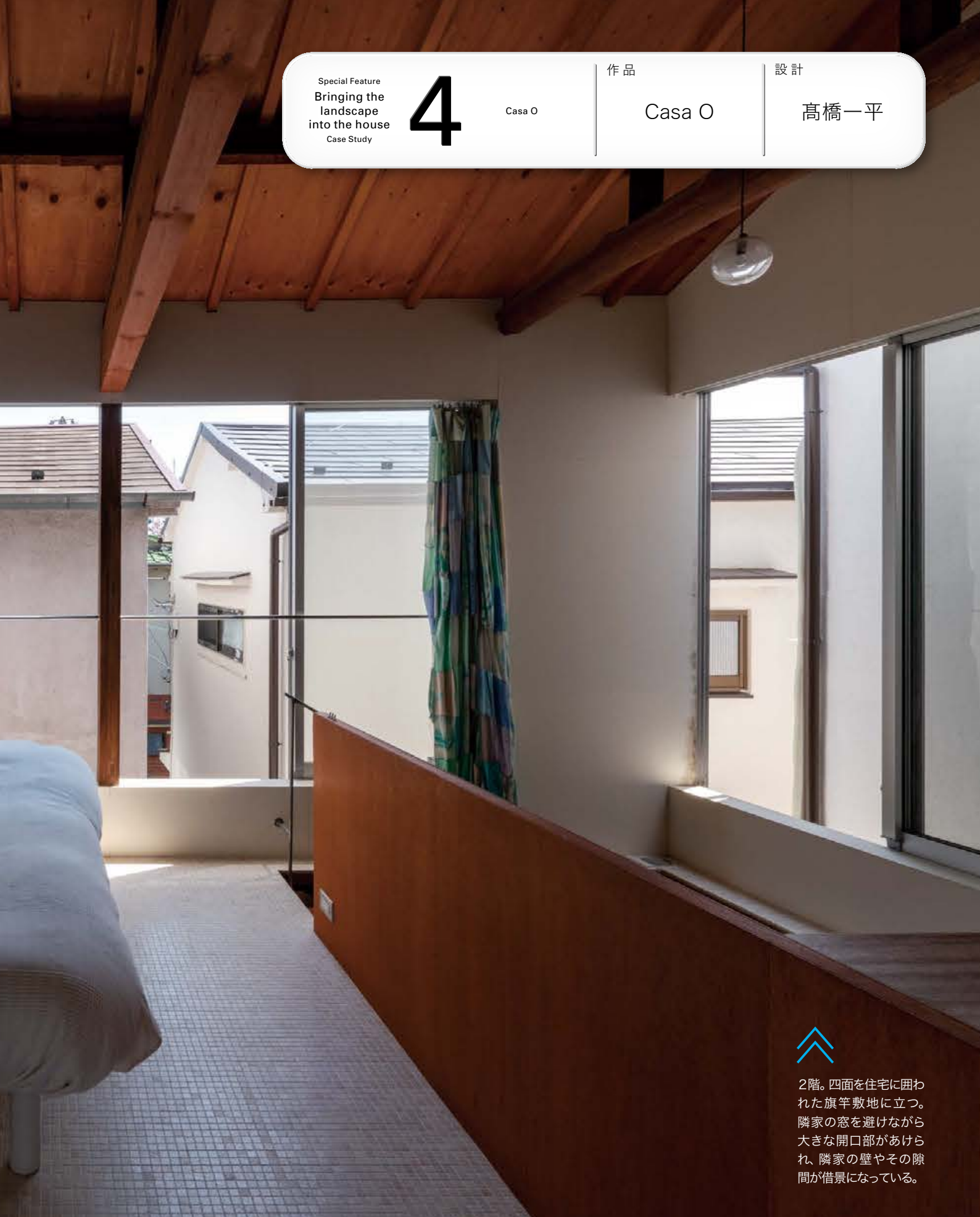
Casa O

作品

Casa O

設計

高橋一平



2階。四面を住宅に囲われた旗竿敷地に立つ。隣家の窓を避けながら大きな開口部があげられ、隣家の壁やその隙間が借景になっている。

東西南北どちらを向いても、隣家の壁ばかりが見える。プライバシーを確保しながら、隣家の壁やその隙間などの環境も、自分の家の一部のように見立てた。住宅密集地の中で、驚くほど開放的な住まい。ひとつの都市的な「借景」だ。



特集／借景 家のまわりも家の中／ケーススタディ4

隣家すらも、借景に

「借景」といえば、緑の木々や遠い山並みといった美しい自然風景を室内に取り込むものである。私たちは無意識のうちにそう考えがちである。しかし、地価の高い東京で借景に恵まれるような敷地は例外中の例外で、大多数の戸建て住宅から見えない風景は、ごく平凡な近隣の家並みであろう。ならば隣家そのものを借景にできないだろうか。「Casa O」は、逆転の発想で都市住宅のあり方に挑戦した、小さな住まいである。

あえて 住宅密集地で 外部に開く

建主は仕事をリタイアした男性。都市の利便性を享受しつつ、静かに暮らせる物件を探した末に、住宅群に埋没するように立つ築45年の老朽化した木造家屋を購入した。東京駅から15分ほどの最寄駅から、歩くこと十数分。商店街や幹線道路にも近く、地域住人以外ほとんど立ち入らない静かな住宅地にあり、「利便性を損なわない隠棲」には理想的な立地である。だが旗竿型の敷地は同時期に建てられた古い木造家屋に取り囲まれていて、隣家との間隔は50cm程度しかない。こうした環境のもとで、建主は「ホテルのように、中に入ると気分が切り替わる家」を要望した。

設計者の高橋一平さんは、既存の古い家屋を壊さずにリノベーションすることを提案した。法規的には建て替えも可能だったが、一軒だけまっさらの新築にするのは周囲の環境を否定することのように感じられ



2階のバスルーム。冬は浴槽とベッドのあいだにアクリル板を設置し、浴槽からの湯気をさえぎることもできる。

ためである。

まずは既存建物の構造材を生かしつつ補強梁などで耐震性を上げ、大きな窓を開けて周囲の環境を内部に取り込むことで、住環境と一体化することを目指した。

「木造家屋が立て込んでいるなかで、あえて外部に大きく開放することによって、日常的ではない家になると考えたのです」と高橋さんは語る。

隣家の壁や その隙間などを「借景」に

改築後のプランはじつにシンプルである。

1階はダイニング、キッチン、トイレ、そして収納。2階は寝室とバスルーム。内部の柱を必要最小限にしてワンルームにし、大きな吹抜けとまわり階段で、約45㎡の空間全体がゆるやかにつながっている。

まず前庭の方向から外観を見る。上下階

2階のバスルームからアプローチ側を見る。南北に抜ける風の通り道になっている。



Special Feature
Bringing the
landscape
into
the house
Case Study

4

Casa O



1階にも大きな開口部が設けられている。正面の隣家の隙間から風が抜ける。



とも大きな窓がうがたれて、室内の様子がよく見えるうえに、さらにその奥の隣家まで視界が抜けている。内部に入ると、南側の隣家のモルタル壁が大きな窓からすぐ目の前にせまる。ここまで開放的で隣家との距離が近いと落ち着かないのではないかと、最初はそう思ったのだが、実際に過ごしてみると、隣家の窓と対面しないように開口部が巧みにとられているので、近隣の人と実際に視線が合うようなことはない。やがて隣家の壁が自分の家の壁のように思えてきて、家の外側にさらに一層、ゆるやかに囲まれているような感覚すらおぼえた。

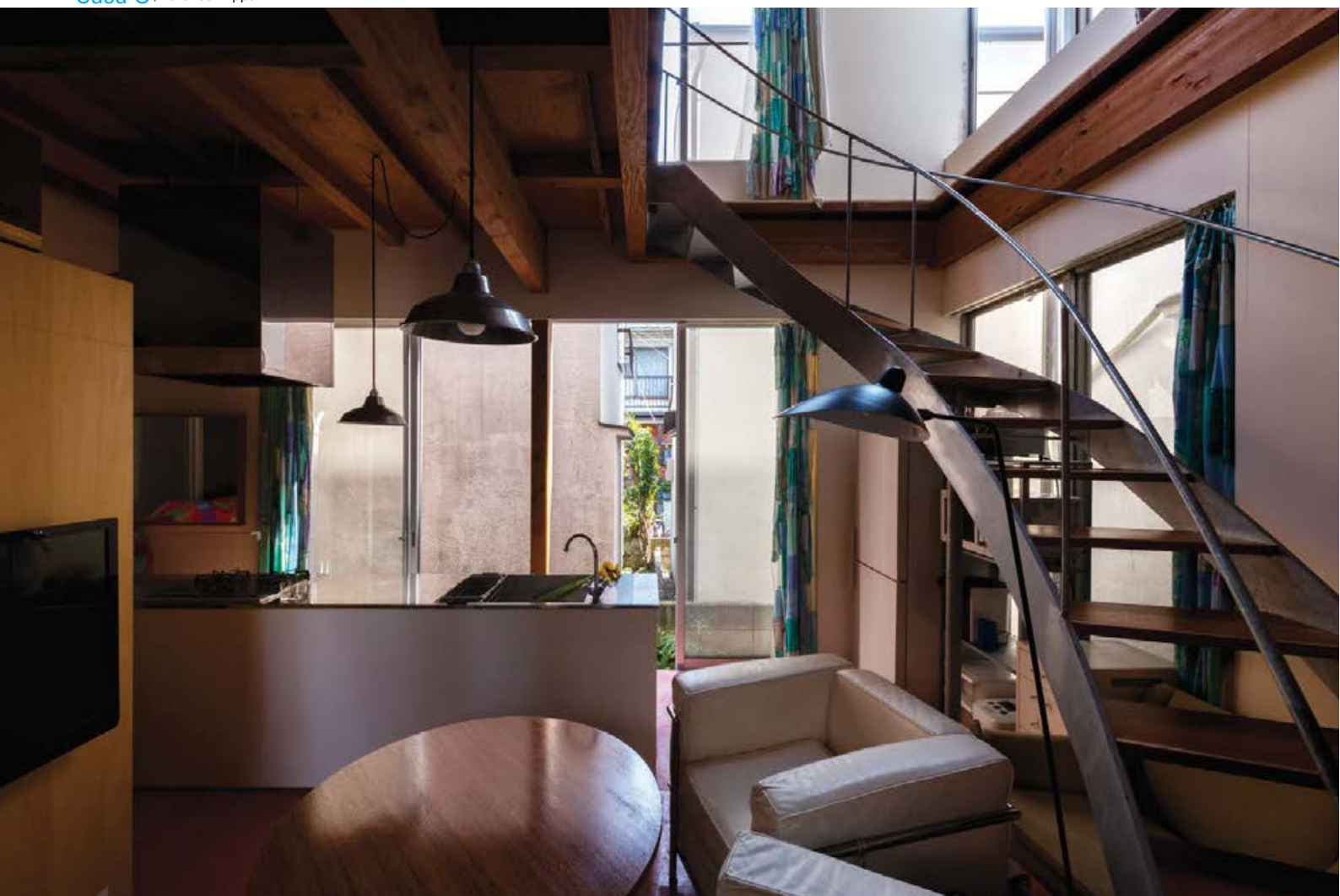
このように、隣家の壁をいわば「借景」のように積極的に取り入れることで、外部環境に対する意識もまた肯定的なものに変わっていく。長年の風雨にさらされたモルタル壁に渋い味わいを見出し、隣家との隙間から射し込む光の変化に敏感になる。

垂直に視線が伸びる 階段空間、 水平に見渡すバスタブ

ゆるやかなカーブを描く階段は、最も陽当たりのよい南西の角に配されている。上下階に連続して大きな窓がうがたれているので、階段を上るにつれて隣家の見え方も連続的に変化し、やがて軒の隙間から天上の空まで視線が抜けていく。ちょうど取材に訪れた正午頃の時間帯に、劇的な光が階段に射し込んでいた。家の規模に比してゼいたく階段空間をとっているのは、こうした垂直方向の開放性による効果を踏まえ



Casa O / Takahashi Ippei



アプローチ側から見た外観。右手に物置。テーブルと椅子が置かれ、前庭にもなっている。



Special Feature
Bringing the
landscape
into
the house
Case Study

4

Casa O



玄関。1階のダイニング越しに隣家、さらに隣家の隙間から向かいの道まで視線が抜ける。



てのものなのだろう。

2階は小屋組みを現しにして天井を高くとった、明るくのびやかな空間。床は全面的に大理石のモザイクタイルが貼られていて、その上にベッドが並ぶ。リゾート地のスパのような雰囲気である。アイランド式の浴槽がぼつんと置かれており、北側の前庭方向に視界が抜けていて、その先にはちらほらと植栽の緑も目に入る。ガラス戸を全開にすると心地よく風が通り抜け、ベラ

ンダにいるような気分になる。浴室を仕切らずに開放的にすることで、自在な楽しみ方ができる空間となっている。ちなみに建主は、夜間に電気を消し、網戸だけを閉めて、外のあかりを眺めながら、ゆっくり風呂に浸かるのが日課だという。

プライバシー偏重で失われるもの

この家で試みられている空間操作は、とりわけ複雑なことではない。古い家屋のモルタル壁や、隣家との隙間を「隠すもの」として閉ざしてしまうのではなく、あるがままに受け入れ、適切な位置に窓を開くことで、風の流れや、視線の通り道、大きな窓からの自然光を得ている。それは思いのほか豊かなもので、プライバシーを重視するあまりに、現代の住宅が失っているものに気づかされる。周囲を壁で囲って、トッ

ブライトから採光するだけが都市居住の解
策策ではない。

ラグジュアリーなホテルとは大分異なるが、これはこれで、当初の建主の要望どおりになった。「ここに住みはじめてから、普通のホテルに泊まるのがつまらなくなりましたので、あまり旅行に出かけなくなりましたね(笑)」と建主。どこにもあるような住宅街の隣家を、景色として再発見した結果である。



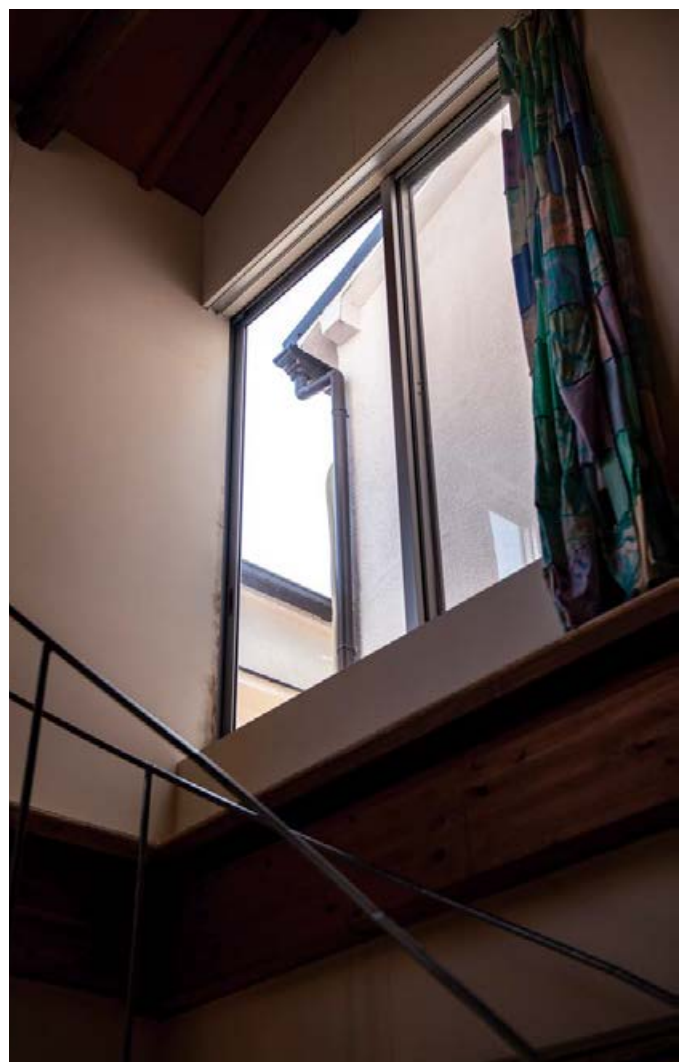
Casa O / Takahashi Ippei



階段。周囲の環境を感じるように、ゆったりと迂回しながら上っている。

キッチンカウンターから隣家の隙間を見る。

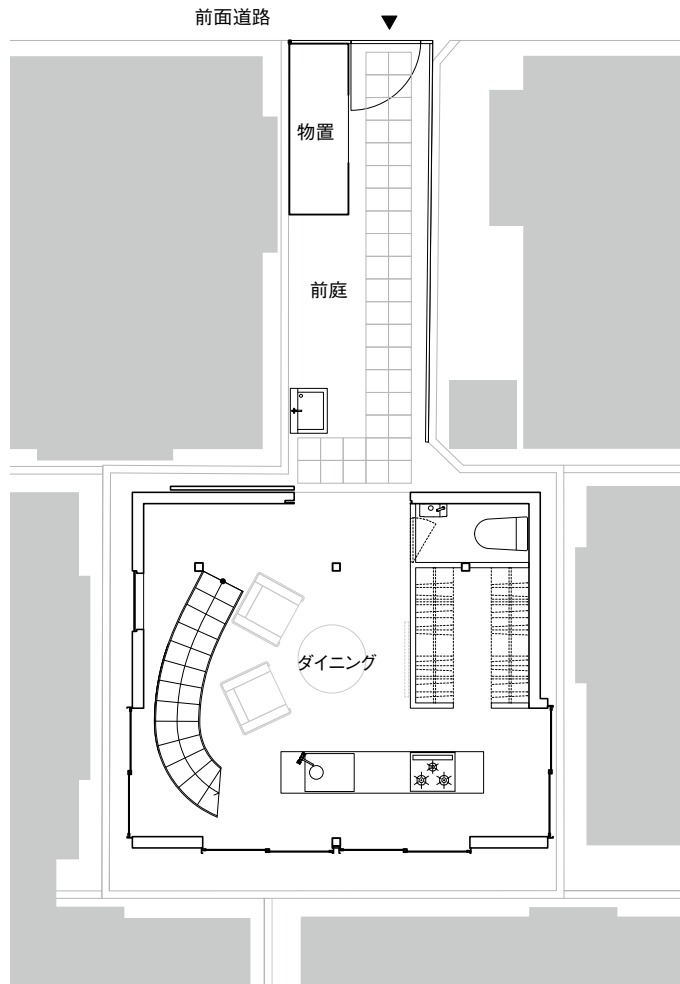
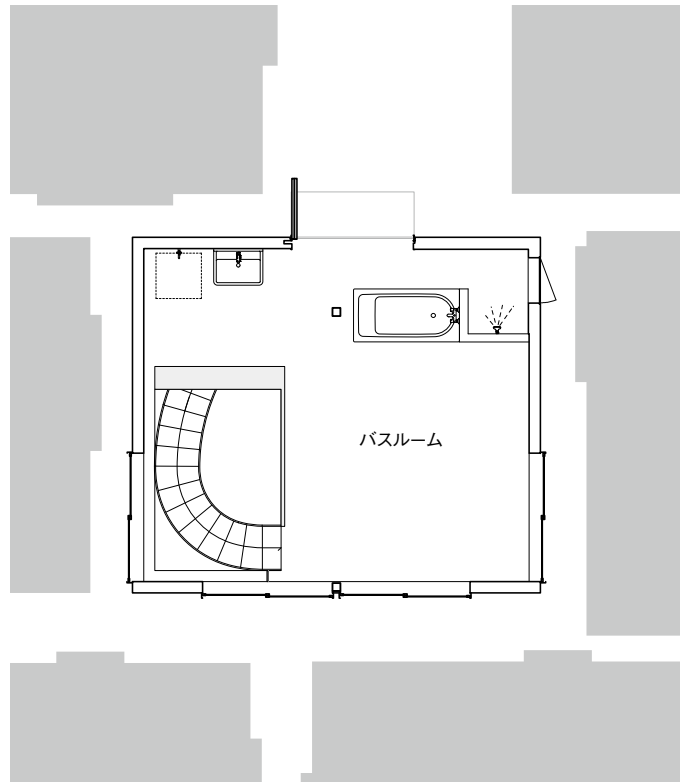
階段から上を見上げると、隣家の隙間から空が見える。



平面図

0 1 2m

1/100





1階全景。隣家の外壁が、内壁のように家を囲んでいる。

「Casa O」

建築概要

| | |
|------|-----------------|
| 所在地 | 東京都 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 2人 |
| 設計 | 高橋一平／高橋一平建築事務所 |
| 構造設計 | 縦建築事務所 |
| 構造 | 木造軸組工法 |
| 施工 | 月造 |
| 階数 | 地上2階 |
| 敷地面積 | 45.24㎡ |
| 建築面積 | 24.65㎡ |
| 延床面積 | 47.68㎡ |
| 設計期間 | 2013年4月～8月 |
| 工事期間 | 2013年9月～2014年1月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|----------------------|
| 屋根 | ガルバリウム鋼板 t=0.5mm 横葺き |
| 壁 | モルタル補修 ウレタン塗装 |
| 開口部 | アルミサッシ、スチールサッシ |

おもな内部仕上げ

| | |
|-----------|----------------------------|
| 1階(ダイニング) | |
| 床 | コンクリート補修材全面塗 t=2mm 防塵塗装 |
| 壁 | シナベニヤ t=5.5mm EP |
| 天井 | 構造材現し |
| 2階(バスルーム) | |
| 床 | 大理石モザイクタイル t=7mm |
| 壁 | シナベニヤ t=5.5mm EP |
| 天井 | 構造材現し |



高橋一平

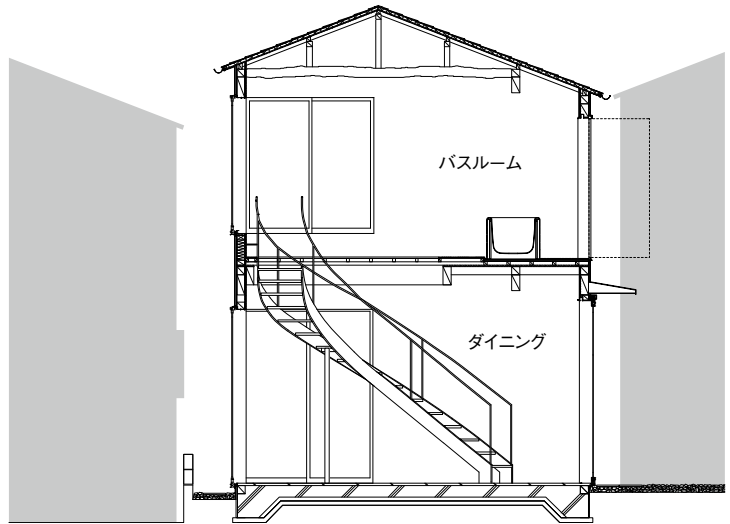
Takahashi Ippei

たかはし・いっぺい／1977年東京都生まれ。2000年東北大学工学部建築学科卒業。02年横浜国立大学大学院建築学専攻修了後、西沢立衛建築設計事務所。10年高橋一平建築事務所設立。11年横浜国立大学大学院設計助手などを経て、現在助教。おもな作品＝「七ヶ浜町立遠山保育所」(13)、「横浜国立大学中央広場+経済学部講義棟2号館」(16)、「アパートメントハウス」(18)。

断面図

0 1 2m

1/100



向かいの道路から、隣家の隙間越しに「Casa O」を見る。



2階のベッドのすぐ脇にある隣家の壁。



緑ばかりが借景ではない

文 橋本 純

景観の詠み人

借景と聞いてすぐに思い出すのは京都の円通寺である。縁側から庭越しに刈り込みと下枝を払った木々のあいだを通して比叡山を望む景観はよく知られている。この寺はもともと後水尾天皇の山荘で、比叡山への眺望を第一に考えてこの場所に居を構えたといわれている。

比叡山は巨大な山塊で、かつ延暦寺の寺域であるから、天皇といえどもその形状に手を加えることはできない。一方、同じ景観でもルイ14世が建てたヴェルサイユ宮殿は、庭園の軸線の消失点までブルボン王朝の土地で、他者から何も借りることなくすべて意のままに眺望がデザインされた。同じ眺望でもまったく内容が異なる。この両者の比較から、借景とは先行して存在する他者世界を取り込むことであり、詠み人の世界観であることがはっきりする。

土地の個人（あるいは法人）所有が進み、窓の外には自分が手出しをすることのできない世界が広がっている現代の日本では、建築家や都市生活者は、すぐれた詠み人であることが求められる。

空の発見と限界

以前に、東孝光の「塔の家」(1966、※1)を訪ね、東夫妻にインタビューをした際に、この住宅は塔Ⅱ都市の砦、のようなイメージが先行しているが、「自分たちは街の観察を楽しむ家だと思っっている」と聞いて驚いたことがある。暴力的なまでの勢いで成長する都市から近代家族を守るための砦のような閉じた住宅というイメージとは裏腹に、内部各所から街の日々の営みがうかがえる意外なほど開放的な住宅であった。これを借景とは呼べないかもしれないが、都市景観とともに暮らす家の始まりとして位置付けることはできよう。

一方で、日本の都市の現実を猥雑さの拡張として批判的に受けとめた建築も同時に存在した。外周部に窓を設けず、唯一空だけに開かれた広瀬謙二の「SH-60」(62、※2)はその早い事例である。もともとこれは広瀬の考えというより建主の強い要望だったと理解すべきであろう。いずれにせよ、都市批判としての空の発見は、その後、安藤忠雄の「住吉の長屋」(76、※3)において都市住宅のひとつの完成形に到達するが、それゆえそこで停

※ 3

1976年

住吉の長屋

設計 / 安藤忠雄



写真 / 安藤忠雄

※ 1

1966年

塔の家

設計 / 東孝光

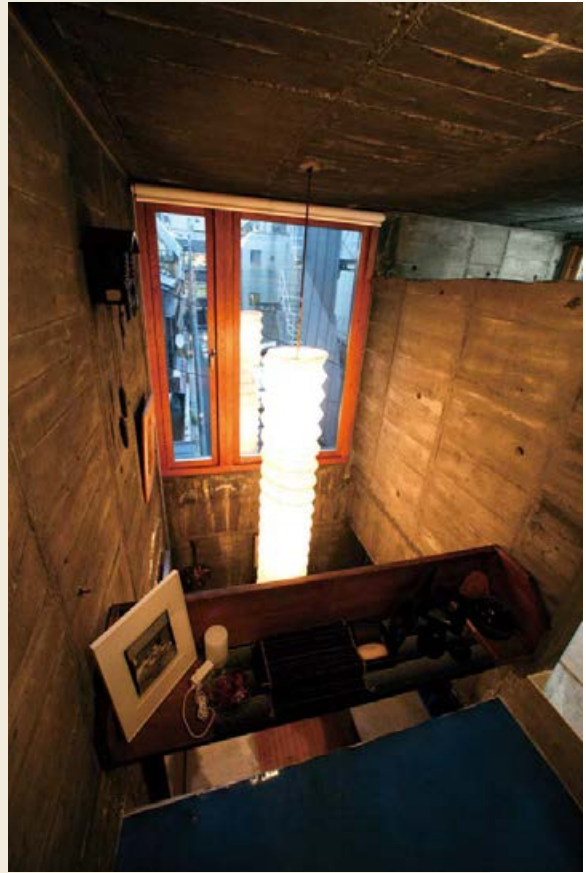


写真 / M E H R D A D H A D I C H I

※ 4

1997年

アニハウス

設計 / アトリエ・ワン



写真 / 山田新治郎

※ 2

1962年

SH-60

設計 / 広瀬鎌二



写真 / 平山忠治

滞する。

景色のインテリア化

90年代後半になるとそうした状況に風穴をあけるような試みがみられるようになる。アトリエ・ワンの「**アニハウス**」(97、※4)はその初期の事例である。敷地の中央に建物を配し、各面が接する外部環境を設計する手法は、それまでにはみられなかったものだ。その後、若い世代の建築家を中心に、家と家の隙間への関心は広がり、建べい率が生み出した聖域としての空隙を有効に使うことへの意識が高まった。

家と家の隙間は視線が抜けていく空間として注目され、やがて窓から眺められる景色そのもの——大半は隣家の薄汚れた塀や壁だったりするのだが——さえも景色として愛でるような事例がみられるようになる。西片建築設計事務所の「**淡路町ビル**」(2002、※5)はその一例であるが、それはもはやわびさびの世界である。

こうした都市の超近景あるいは微地形への関心は数多みられるようになるが、建物を浮かせて地面をGL付近で観察するような中山英之の「**2004**」(06、※6)には、建築はそもそも大地の上の間借りしている存在なの

だから、その境界を見つめることで建築が建つことの重みを伝えたいという姿勢が表れているという点で、借景論の極北に位置付けられるだろう。

さて、現代住宅における借景は、その後、西沢立衛の「**森山邸**」(05、※7)や乾久美子の「**アパートメントI**」(07、※8)、前掲のアトリエ・ワンの「**ハウス&アトリエ・ワン**」(05、※9)といった、住宅密集地においても外部に大きく開かれた住宅が登場し、外部の景観をインテリアの一部として取り込むようになる。借景はより深く住宅内部に侵入し、今日の住宅のひとつの方向性を形成したのである。現代住宅における借景史を概観すれば、このように整理できるだろう。

そこに通底しているものは、景色というものを通じて外に開かれ他者とならうとする人間の本質的な欲求ではないかと思う。小さく閉じた空間の中で内側ばかり見ているようでは、精神に異常を来しても不思議ではないからだ。借景は、他者への依存に始まり、やがて他者への関心へと移行し、景色の貸し借りというコミュニケーション手法を生み出し、インテリアと景観の融合した室内環境の創造へと展開し、その意味を拡張させながら閉鎖的な現代住宅を内側から解体するエンジンとなったのである。

Hashimoto Jun

はしもと・じゅん / 1960年東京都生まれ。83年早稲田大学理工学部建築学科卒業。85年同大学大学院修了後、新建築社入社。「新建築住宅特集」「新建築」「J.A」の編集長などを経て、2008年より同社取締役。15年ハシモトオフィス設立。

※ 8

2007年

アパートメント I

設計 / 乾 久美子



写真 / 阿野太一

※ 5

2002年

淡路町ビル

設計 / 西片建築設計事務所



写真 / 中川敦玲

※ 6

2006年

2004

設計 / 中山英之



写真提供 / 中山英之建築設計事務所

※ 9

2005年

ハウス&アトリエ・ワン

設計 / アトリエ・ワン



写真提供 / アトリエ・ワン

※ 7

2005年

森山邸

設計 / 西沢立衛



写真提供 / 西沢立衛建築設計事務所

若きセレブがたむろするリュブリャナのホテル

今や珍しくなったが、陸路で訪れる国の場合、国境検問所で初めてスタンプをもらうとちよつと緊張する。

スロベニアはスポーツ選手を多数輩出している。名はよく聞くが入国は初めて。人口は約207万人。ユーゴスラビアから独立した若く小さな国だが、クロアチア、ハンガリー、イタリア、オーストリアに囲まれ、アルプス山脈の南端でもあり、アドリア海にもわずかに接している自然豊かな国。

東欧、中近東などいろいろな文化が混在し「交差路」といわれ、その歴史はきわめて複雑。古代ギリシャ・ローマ時代のイリュリア王国（*1）は戦いを繰り返していたとされ、あのシェイクスピアの戯曲「十二夜」にも登場した。リュブリャナはフランス第一帝政時代にはイリュリア州の首都だったこともある。

あまり知られていないが、ヨジエ・プレチニツク（*2）というスロベニア出身の建築家がいた。おもに20世紀前半に活動し、国を代表する建築家とされ、首都リュブリャナの市内でいくつもの仕事を見ることができ、その作風はかなり変わって前時代の様式やウィーン分離派の流れも感じ取れ、今や「古きモダン」となったものとか、民族的なものも強く感じさせる。不思議な造形感覚で一筋縄ではいかない。混在する文化を象徴しているようだ。

リュブリャナ市街にあるリュブリャニツァ川の有名な「三本橋」（これもプレチニツク設計）付近は観光客であふれていてカフェもいっぱい。

プレチニツクの建築をいくつか見てから、ノックス（NOX）という2013年にオープンしたホテルにチェックイン。ニモ・スタジオ（NIMO STUDIO）を主宰するスロベニアの若き建築家ニキ・モト（Niki Motoh）の設計である。都心から少し離れているが、外観が刺激的だからすぐわかる。1階には有名家具メーカーのショールームが入っ



溶けそうな、見えないトイレ。

ていてたくさんさんの名作椅子に出会うこともできる。夜はちよつと気取った若者が多い。24室すべての部屋のデザインが異なることを売りにしていて、それは楽しい。

私の部屋は「トスカーナ」という名だったのだが、バチカンのシステイーナ礼拝堂にあるミケランジェロの天井画「アダム」の創造」の指の拡大写真がベッドの上に掲げられ、唐突にアルネ・ヤコブセン（*3）の黄色いエッグチェアがあつたりしてハチャメチャ。しかし抑えられた色彩のいいカラスキームで仕上がっている。外部のデッキレベルと調整するため部屋の半分が1段上がっているから、きわめて危険なのだが、それほど広くない空間に変化が生まれていておもしろい。

前号（TOTTO通信）2019年春号の連載で、私は「バスルームは溶けていく」と述べたが、ここもそう。一応タペストリー加工をしているガラスを使っているが、見せてもらった「BEACH」という名の部屋では、すべて透明ガラス張りで見ええ。ブラインドもなかった。あのガラスさえなくなる日も近い！

下着はしばらくなくならないだろうが……。

*1 イリュリア王国…近年ではオーストリア帝国に1816年から49年まで存在した構成国家。文学や演劇のなかでは、しばしば空想の国として登場する。「TOTTO通信」（2015年秋号）の「旅のバスルーム」では、南アフリカの「イリュリア・ハウス」を掲載した。

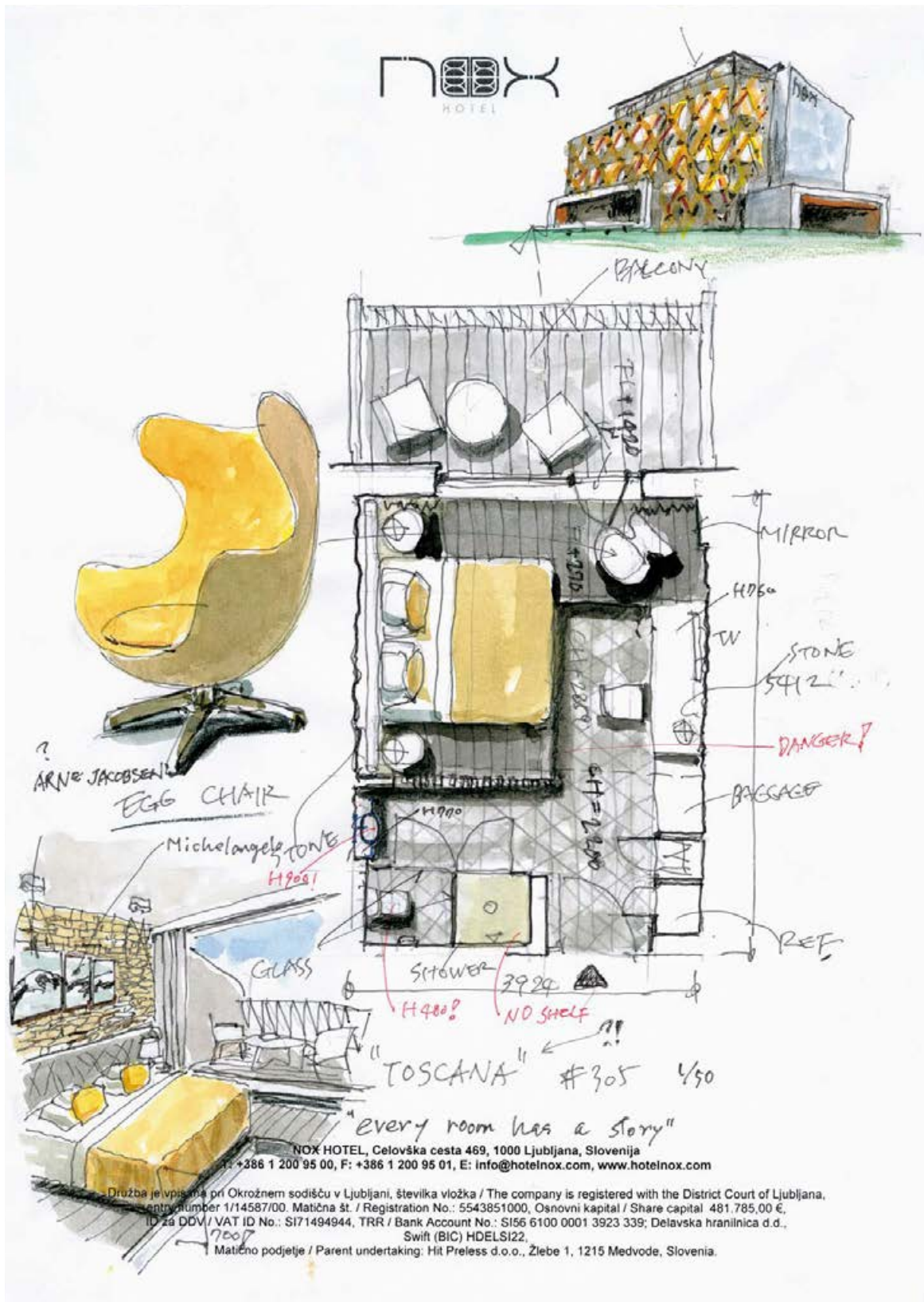
*2 ヨジエ・プレチニツク / Jože Plečnik (1872~1957)…スロベニア出身の建築家・都市計画家。リュブリャナ生まれだが、オットー・ワグナーの下で働き、ウィーン分離派運動にもかかわった。その後、ウィーン、ベオグラード、プラハ、リュブリャナで活動し、スロベニアに多くの作品を残した。おもな作品に「ツァッヘルハウス」（1905）、「三本橋」（32）、「スロベニア国立大学図書館」（41）、「リュブリャナ中央市場」（42）など。「+u」2010年12月号所収。

*3 アルネ・ヤコブセン / Arne Emil Jacobsen (1902~71)…デンマークの建築家・デザイナー。モダンデザインの代表的建築家。おもな作品に「SASロイヤルホテル（現ラディソンブルーロイヤルホテル）」（60）、「デンマーク国立銀行」（71）など多数。セパンチェアやエッグチェアなどの家具デザインも多い。

うら・かずや / 建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99~2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイナー研究室主宰。著書に「旅はゲストルーム」（東京書籍・光文社）、「測って描く旅」（彰国社）、「旅はゲストルームII」（光文社）がある。



ピラン塩田の「塩」。おいしい。



フロアに
レベル差をつかって
テラスとつないだ計画。



数寄屋
でもなく
新興数寄屋
でもない

吉屋信子邸 設計／吉田五十八



1
応接室（主室）。ピークに達した後、建築家にはどのような道がありうるのか。新興数寄屋によりピークに達した吉田五十八の場合は、この部屋によく表れている。

現代 住宅 併走

第四十四回

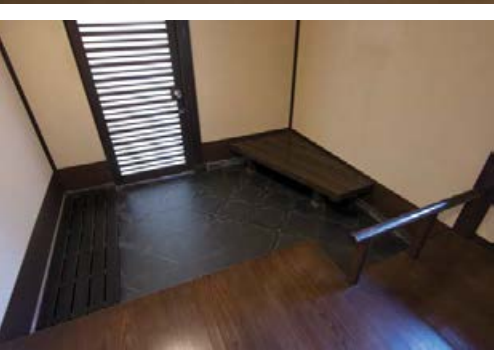
文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均

(吉田五十八のポートレイトを除く)



2 応接室(主室)右手の上部に注目。杜寺風というか、新家風というか、新興数寄屋では見られなかった要素が顔を出す。

3 玄関。櫛の厚板は、木口(こぐち)まで貼り物。

吉

田五十八の影響くらい説明しにくいものはない。なぜなら、現代、

世間一般につくられてきているちょっと高級なビルの中の料亭やモダンな和風旅館は、ことごとく吉田流を取り入れることで、美学的には伝統と近代、構造的には木造と鉄筋コンクリート造の矛盾を調停して成り立っているからだ。こんなに広く影響を与えると、逆に、どこが吉田の影響なのかかえって見えなくなってしまう。

吉田流の伝統的木造住宅のつくり方を、

「新興数寄屋」

と呼ぶ。江戸時代に発し、明治・大正と連綿と続く伝統的数寄屋を、昭和に入ってから吉田が革新したから「新興」を頭に付ける。

新興数寄屋が広まったのは、旧来の数寄屋が美学上も構造上も時代の流れに合わなくなったからだが、加えて、吉田が新しいやり方を誰でもわかるように宣言したからだだった。建築家による宣言といえは、すく大正12(1923)年の7人の青年建築家による「分離派宣言」が思い浮かび、言葉の力と造形の力がコンビを組んだときの爆発力を思うが、同じことを吉田はひとりで行った。分離派はそれまで主流であった欧米の歴史主義に対し、吉田は旧来の数寄屋造に

対し。

吉田の宣言は、昭和10(1935)年、『新建築』誌上に、「近代数寄屋住宅の明朗性」と題した論文として発表され、まず冒頭で、ル・コルビュジエとヴァルター・グロピウスに影響を受けていると語り、続いて「平面」
「広縁」
「天井高」
「柱と壁の部面」の4項目に分けて新しいやり方を述べるばかりか、なんとそれを5枚の図を使って図解して見せる。

20世紀の建築のモダン化は、分離派だけでなくたくさんのグループが宣言とともに推進しているが、図解付きはル・コルビュジエと吉田のふたりだけ。吉田は、ル・コルビュジエを強く意識していた。

図を見ていただく(46ページ)。第1図は、伝統の畳式と西洋の椅子式のあいだに起こる視線の高さの矛盾を調停する広縁のあり方を示す。

第2図の旧来の数寄屋は、第3、4図と段階を追って近代化する。第5図の新興数寄屋に至る。

壁

の柱や長押(ながし)をはじめ天井の棹(さし)など、消せる部材は消してモダン化が実現している。ただし、面の組み合わせのポイントとなる柱や鴨居(鴨居)は消さないし、畳をはじめ床などの床面には手を付けない。昭和10年に宣言を出し、翌11



現代住宅 併走

Yoshida Isoya × Fujimori Terunobu

5

主室につながる和室。定番の床柱がないことに注目。

4

玄関側の外観。伝統とモダンの巧みな融合はさすが吉田。



ふたつの暗い帯は、たいいていの日本人にとってあまりに自明で、空間上の無意識に属するが、近代的建築家たる吉田は、その

暗い帯を払う。

屋根の下に、深い軒が生む軒下の暗がりとおープンな縁側が見えないのは、これぞ吉田流で、日本の旧来の数寄屋が見せ場とした深い軒と縁側を吉田は嫌った。深い軒の出と縁側は、それぞれ軒下と縁の下というふたつの暗い水平の帯を立面にもたらすが、その暗さを払う。

まず外観から。一見すると伝統的だが、よく見ると独特で、たとえば屋根は、頂部の棟と左右の下り棟は伝統の瓦なのに、屋根面そのものはスレートで葺いている。それまでのように日本瓦を使わなかったのは、傾斜をゆるくし、厚い焼き物の瓦を薄い天然スレートに変えることで、屋根の視覚上の重さを軽くしたかったのだろう。

今回、訪れた「吉屋信子邸」は、昭和11年の麹町の初代が空襲で焼失した後、戦後すぐ昭和25（1950）年、麹町に2代目を建て、さらに昭和37（1962）年、鎌倉に移ってからつくれた3代目となる。初代、2代と新興数寄屋でまとめられているが、3代はどうか。

（1936）年に、「吉屋信子邸」「杵屋別邸」など5作を一気に世に問い、世間と建築界で不動の地位を確立する。



門と塀。強さを減じ、主人が女性であることをさりげなく示す。

8

7

さりげない外観。でも縁側の下の間は注意深く払う。



戸袋に脚を付けた例は日本初。

6





現代住宅
併走

Yoshida Isoya × Fujimori Terunobu

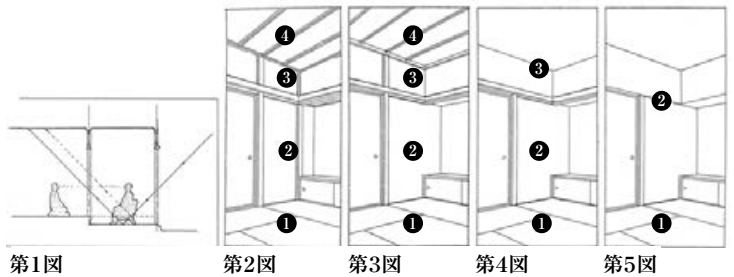
9
執筆のための書斎。
10
寝室。右手奥に造り付けの鏡台。
11
鏡台は、女性用寝室には重要なアイテムだった。



無意識を意識し、払った。深い軒の出を欠くヨーロッパ建築の、暗がりをもたない立面を意識しての選択だった。

軒下と縁の下の闇を払い、縁側という内か外かわからないようなあいまいな空間を消し、建築の立面をファサードとして成り立たせたいという欲求が吉田にはあったにちがいない。そう思われるのは、この家の引き戸の造りで、伝統的造りにしては異例なまでに縁取りが厚いし、引き戸を納める戸袋も強い存在感を示す。

建築家にとって雨戸は難敵で、戸袋は下手をすると目尻にばん



①～④は、長押などの見える部材数を減らし、区切られた面の数が減っていくことを表している。

出典：『昭和住宅物語』（著者：藤森照信／新建築社）

吉屋信子邸

(現・吉屋信子記念館)

Yoshiya
Nobuko
House



建築概要(改修)

| | |
|------|-------------|
| 所在地 | 神奈川県鎌倉市 |
| 主要用途 | 専用住宅(当時) |
| 設計 | 吉田五十八 |
| 施工 | 水澤工務店 |
| 敷地面積 | 1,877.21㎡ |
| 建築面積 | 207.72㎡ |
| 延床面積 | 207.72㎡ |
| 階数 | 地上1階 |
| 構造 | 木造 |
| 竣工年 | 不明(1962年改修) |
| 図面提供 | 鎌倉市教育委員会 |

Yoshida Isoya

吉田五十八

1894年東京の太田胃散創業者の息子として生まれる。幼少より母親に伴われ、歌舞伎界になじみ、後には歌舞伎の舞台で「プロ」として長唄を歌うまでになる。東京美術学校(現・東京藝術大学)で岡田信一郎に学び、1923年卒業後、表現派系のデザインを試みたが、渡欧して伝統に目覚め、数寄屋造のモダン化を図り、新興数寄屋を打ち立てた。戦後の旅館や料亭で影響を受けないものはないだろう。しかし、なぜか茶室は手がけていない。

NO PHOTO

写真提供/東京藝術大学

Fujimori Terunobu

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=「明治の東京計画」(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、



建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞。



そうこうを貼ったようになってファサードをだいなしにする。戸袋をどう納めるかは、アントニン・レーモンドや前川國男があれこれ工夫しているが、ここでは吉田は、戸袋の下に2本の脚を付け、戸袋がついでの造りではなく地面に自分の脚で立つ小さな建築であることを示した。私の知る限り、このような戸袋はほかにない。

中を見てみよう。

中心の部屋となる椅子式の主室(台所、食堂、応接室)と畳の和室の両方とも、柱も、鴨居も天井の回り縁も太く、垂直と水平の線がクッキリハッキリ表現されているが、こういう線材の強調は昭和10年の宣言にはなかった。宣言は、線を弱めたり消したりして、面の組み合わせを前面に出していた。ただし、宣言どおりの造りもあり、たとえば畳敷きの床の間を見ると、これだけ幅がある床の間なのに、床柱も柵もなく、太い材と細い材で枠取られたいくつもの面が

「構成の美」を見せる。構成の美は、グロピウスが認めた唯一の美。

この家は、新築ではなく、明治の頃に建てられた住宅を山側に動かし、吉田が切り刻んで新しくしているが、おそらく、この床の間も、位置と大きさは昔のまま右手にあった床柱を抜き、その右側の違い柵と地袋を取っ払ったにちがいない。

昭和10年の宣言とは異なる造りは見られるものの大筋は宣言の延長上にあると判断されるなかで、ひとつだけ延長上とは言い難い表現がある。主室の柱の上部にある梁や桁がその断面をむき出しにして目を引きつける。木の柱の上部にこういう強調を設けるのは、歴史的にいうと寺院の「組合物」にちがいない、旧来の数寄屋とも新興数寄屋とも異なる。

おそらく、今回の改造を進めるなかで天井裏から現れ出た梁と桁をどう扱うかの思案中に、宣言どおりにすべて天井裏へと

隠すのではなく、梁と桁を切つて断面を表現として露わにすることのおもしろさに気づいたにちがいない。古屋の改造だからこそ新しい表現となった。

と桁の露出を含め、全体を見終えた後の印象は、20年ほど前、今はなき新興数寄屋の代表作「梓屋別邸」を見たときとは結構ズレてしまい、降幡廣信の古民家再生に近いものを感じた。

久しぶりに訪れた吉田五十八作品で一番魅力的だったのは玄関の内外で、とりわけ中は、斜めの腰掛けといい、踏み込みの手すりといい、吉田流の「芸っぽさ」が少ないのがすばらしい。とはいっても吉田流は健在で、踏み込みに使われている厚い櫻の板は貼り物で、なんと、薄くはいだ板を、板面だけならまだしも、木口までそのまままして厚さを出している。こんなことをしたのは吉田だけ。吉田ウソッパチの面目躍如。

experience TOTO

成田国際空港第1ターミナル



成田国際空港第1ターミナルの外観。

日本の玄関口に
最先端の
おもてなしトイレ

取材：文／大山直美 写真／TOTO（ポर्टレイトを除く）、成田国際空港株式会社（上の外観写真）

長液晶パネルでは水をテーマにした映像を流している。

トイレ入口。トイレのサイン下に空室状況を示す液晶パネル。縦

今年4月3日、成田国際空港第1ターミナルビル南ウイング1階に、TOTOプロデュースの最先端トイレ「experience TOTO」がオープンした。

同空港は4年前にもTOTOとのコラボレーションにより、第2ターミナルにクライндаイスサムアーキテクトツが手がけた「GALLERY TOTO」をオープンしており、日本のトイレのすばらしさを体感する場としては2例目。

ウォシュレットを
体験してほしい

成田国際空港の秋山桂央さんによれば、両者はターミナルが異なるだけでなく、「GALLERY TOTO」が入場制限のある出国エリアにあり、出国手続きをすませて荷物を預けた後の乗客が利用するのに対し、「experience TOTO」は誰でも入れる到着エリアにあって、受け取ったスー

ツケースなどを持ち込む人が多く、とりわけ初めて日本を訪れた外国人が最初に体験するトイレであることから、似ているようで違いは大きいという。TOTOの楠野裕子さんは「荷物の大きさや動線、人の分散のしかたなど、すべて違いますので、そのへんから全体のプランを考えていきました」と語る。

訪日外国人に最新の日本のトイレ文化を体験してもらうためには、今回とくに力を入れたのは、「ウォシュレット」の体験促進。楠野さんによると、ウォシュレットの存在は知っているもの、体験したことがない外国人は多く、説明が日本語でわからないという声が多いという。

そのウォシュレットの訴求を含め、トイレの最先端技術を知ってもらうために活用したのが、IoT技術。具体的には、入口の両脇にあるトイレの空室状況を示す液晶パネル、そして各ブース内に設置したタブレットリ



ウォシュレットのタブレットリモコン

タブレットリモコンでは、機能を動画でわかりやすく説明。



5言語から選択でき、初めて利用する外国人にもやさしい。

空室状況を示す液晶パネル

トイレ入口のパネルでブースの空室状況を確認できる。



足跡のサイン上に並ぶと頭上のセンサーで行列具合を把握。



5言語から選択でき、初めて利用する外国人にもやさしい。

次に、入口の両脇にあるのが、それぞれ男女トイレの空室状況をリアルタイムで表示する液晶パネルだ。このパネルと、後述するブース内のタブレットリモコンは、バカン・N T T東日本・TOTOの共同企画によってつくられたもの。

空室状況がひと目でわかるパネルを設置

まず外側から見ると、正面の壁に縦長の液晶パネル4枚が配置されており、4枚が一体となつて、水をイメージした映像や「おしりを洗う気持ちよさ」を表現したポップなイラストアニメーションが映し出される。「あまりストレートにおしりを出して洗うことを絵にすると品位にかかりますし(笑)、かといって抽象的すぎるとわかりにくくなるので、非常に難しかったですね」と楠野さん。

バカンはレストランの空席情報やトイレの空室状況などを配信するサービスを行うベンチャー企業で、社長の河野剛進さんは「TOTOさんとはずっと一緒に組み合わせたので、うれしかったです。僕自身、トイレが混んでいて困った経験は何度もありますし、これを自分の問題としてとらえ、空いているところを自分で選び、待つかどうか

奥のトイレ内部はモノトーンの落ち着いたインテリア。どのブースもスツーカーが納まるよう、通常よりかなり広い面積を確保しており、扉も開口が広く、出入りが容易な折れ戸式で、空気が一目瞭然だ。女子トイレは見通しがきくアイランド型洗面コーナーと、スタイリングコーナーを分けることで混雑緩和を図る一方、男子トイレはプライバシー確保のため、小便器のあいだに仕切りを設けるなど、TOTOが永年かけて培ってき

も選択できることによつて、日常がちよつとよくなる世界を目指してきました」と語る。

パネルには男女トイレの簡易な平面図が描かれ、男女トイレの各ブースのドアに設置したセンサーと連動して図面上に空室か満室かを表示。空室が残りひとつになると、パネル右上の「空」のサインが「混雑」に切り替わる。さらに、通路に沿って行列ができる、通路沿いの天井に設置したセンサーが感知し、行列の長さも表示される仕組み。表示は日本語、英語、簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語の5言語が随時切り替わる。パネルにはブースごとに異なる機能がピクトグラムで表示されていてわかりやすい。河野さんによれば、将来はスマホやパソコンと連動させ、実際にトイレまで行かずとも混雑具合がわかる仕組みもつくれるそうだ。

女子トイレ

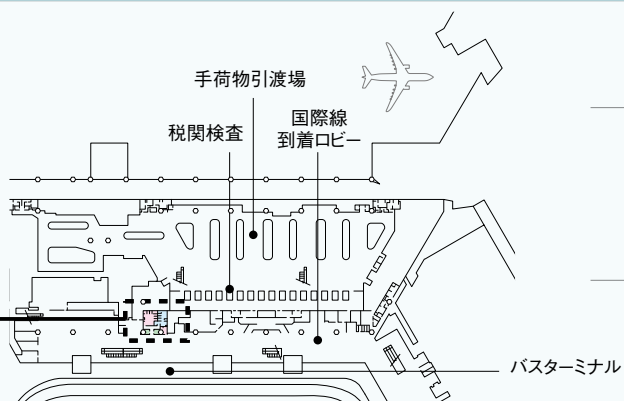


オストメイト配慮ブース。機能分散で多機能トイレの混雑を解消。▼

▲ 洗面コーナーとスタイリングコーナー。分離して混雑を緩和。



洗面コーナーとブース。開口の広い折れ戸式扉でスーツケースを持って入りやすい。



成田国際空港
第1ターミナル
南ウイング1階
(到着ロビー)

0 20 40m

1/4,000



多機能トイレ



車いす使用者優先トイレ。4言語の音声案内で機能を説明。▼

▲ トイレ入口脇に多機能トイレを設置。オストメイト対応。



男子トイレ



小便器コーナー。プライバシー配慮のために仕切りを設置。

experience TOTO



成田国際空港第1ターミナル

建築概要

| | |
|------|---|
| 所在地 | 千葉県成田市古込1-1 成田国際空港 第1ターミナル南ウイング1階 (国際線到着ロビー) |
| 事業主 | 成田国際空港(株) |
| 設計 | TOTOアクアエンジニア |
| 施工 | TOTOアクアエンジニア、 株乃村工芸社 |
| 延床面積 | 約150㎡ (多機能トイレ2室/授乳室1室/ 女性:ブース7室、洗面5台、 スタイリングコーナー/ 男性:ブース4室、小便器5台、 洗面5台、スタイリングコーナー) |
| 設計期間 | 2017年2月~2018年10月 |
| 施工期間 | 2018年10月~2019年4月 |

おもなTOTO使用機器

- 女子トイレ/男子トイレ
- 壁掛大便器セット・フラッシュタンク式
UAXC3CL(R)1
ウォシュレット・アプリコトP
TCF5830AUPR
オストメイト対応マルチシンクパック
XPSA71C71WW
ツインデッキカウンター(ボウル一体タイプ)
MKWE
クリーンドライ(高速両面タイプ)
TYC420W
LED照明付鏡
EL80019
壁材 ハイドロソリッド
- 男子トイレ
- マイクロ波センサー壁掛小便器セット
XPU22A
小便器下床材
ハイドロセラ・フロアPU
- 多機能トイレ
- フラットカウンター多機能トイレパック
XPDA8RS5211WWG
収納式多目的シート
EWC520AN

▶▶▶ ウェブサイトでも「experience TOTO」を紹介しています。

<https://www.toto.com/jp/experiencetoto>



成田国際空港
営業部門
旅客ターミナル部
営業管理グループ
主席

秋山桂央

Akiyama Kaoru



バカン
代表取締役

河野剛進

Kawano Takahiro



TOTO
販売統括本部
商品販売
企画グループ
企画主査

楠野裕子

Kusano Yuko

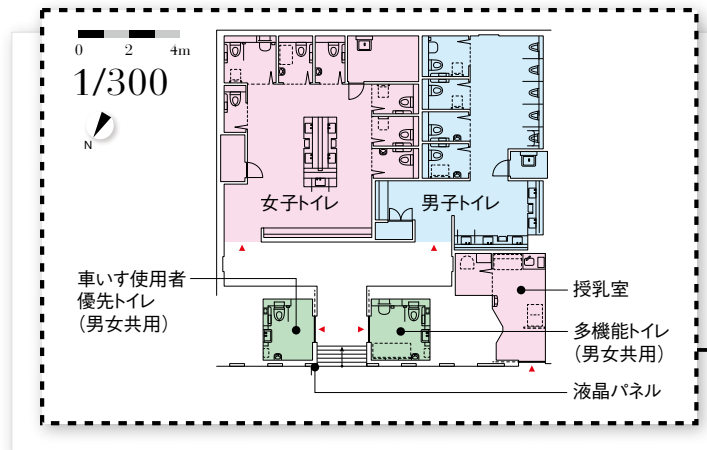
た最先端トイレのノウハウが余すところなく生かされている。また、入口寄りの通路の両側には、車いす使用者優先トイレと多機能トイレを完備。性別にかかわらず使える共用トイレなので、異性による介助や性的マインリテイの方にも安心だ。男女トイレにもオストメイト配慮器具やベビーシートのあるブースを設けるなど、機能が分散されている点も、多機能トイレの混雑緩和にひと役買っている。

「タブレットリモコン」で5言語に対応

さて、最後にじっくり見学したのが、ウォシュレットの「タ

ブレットリモコン」だ。ブースのドアを閉めると起動し、5言語から言語を選択すると「おしり」「ピデ」「音姫」「ノズルきれい」の4つのメニューが表示される。「これまで使い方がわからない外国人のお客さまが誤ってウォシュレットを起動させ、止め方がわからず、非常呼び出しボタンを押すことなどがあったので、多言語対応のタブレットリモコンによって、そうした悩みが解消されることを願っています」と秋山さん。

開発にあたっては、試作品をTOTO本社内に設置し、社員80名ほどに使用してもらい、問題点を指摘されるたびにプログラムリングを改良し、また使っ



もらうという試行錯誤の繰り返しだったという。

弱視の人にもわかりやすい表示など、ユニバーサルデザインの視点から考えるTOTOの基準は厳しく、「バカンさんにはデザインと使いやすさのせめぎあいでご苦労をかけた」と楠野さんは振り返る。「通常はもつとしっかり基準を満たすものをつくってから試すというのがTOTOさん本来のスタイルだと思いますが、今回のプロジェクトは結構ふんわりと始動し、スケジュールと折り合いをつけながら細かいところは何度も改良を加えていくというプロセスだったので、そこが難しかったです」と河野さん。目下、心配な

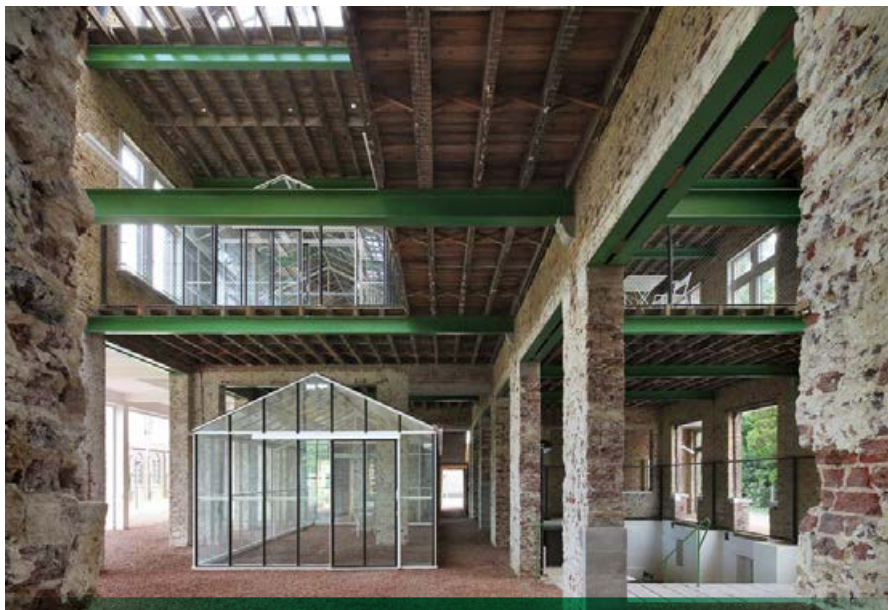
のは、お客さまがタブレットリモコンに興味を示すあまり、各ブースの使用時間が長くなって混雑を招かないかという点だ、とお三方は苦笑する。

ただし、じつはこの試み、緒についたばかりで、タブレットリモコンは遠隔でアップデートできるため、お客さまからの声を反映して、より使いやすくなるようにシステムの改良が可能だという。また、今後はIoT技術をトイレの管理や清掃のチェックに活用していく計画もあるそう。ユーザーの声を拾って進化していける、世界でも唯一のトイレなので、今後の展開に期待しています」と秋山さんはしめくくった。

ヴァリエテ / アーキテクチャー / デザイア

VARIETE / ARCHITECTURE / DESIRE

2018年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、
新進気鋭の建築家へ贈られる銀獅子賞を受賞し、世界的にも注目を集めつつあるベルギーの建築家ユニット、
アーキテクテン・デ・ヴィルダール・ヴィンク・タユー（以下ADVVT）。
教育も建築の重要な一部分だととらえ、第三者の視点を自身の作品に反映させるADVVTは、
TOTOギャラリー・間での展覧会に先がけ、日本の大学でワークショップを実施しました。
その意図を手がかりに、彼らの活動と展覧会のコンセプトを紹介します。



© Filip Dujardin

カリタス

ベルギー・メッレ / 2016

ヴァリエテ / アーキテクチャー / デザイア

文 / アーキテクテン・デ・ヴィルダール・ヴィンク・タユー

アーキテクテン・デ・ヴィルダール・ヴィンク・タユー（以下ADVVT）は、さまざまなかたちで建築を受容する。その実践には建築だけでなく展示や書籍の制作も含み、とくに教育は重要な部分を占める。私たちが行うことは、これらすべての必然的な結果であると確信している。それは私たちにとって渾然一体のものだ。

ベルギー・アントワープのdesingel Art Campusにおける初めての展覧会を経て、展示はADVVTにとって新しい経験となった。ベルギーの展覧会では、大きな空間をひとつづきの7つの異なる部屋に描き直した。部屋の壁は、私たちが2010年に行ったインスタレーションの材料を再利用してつくった。この「再利用」という行為が、展覧会のテーマの一環だった。展示するということは、もはや展示するだけでなく、思索するという行為になったのだ。

さらにスイス・チューリッヒのgra exhibition spaceで開催した展覧会「carrousel」(メリーゴーランド)では、私たちは7つのプロジェクトで構成した展示空間に他者の作品を展示した。他者の作品は、私たちの世界観を十分に説明し得るし、それを私たちの「universum」(宇宙)と呼ぶことができる。この展示では作品そのものよりも「universum」(宇宙)を表現するアイデアのほうがより重要になったのだ。

18年、ADVVTはTOTOギャラリー・間より日本での展覧会開催の招待を受けた。これはもちろん名誉なことだったが、同時に私たちに与っては、自身の作品のみならず、文化的視点での新たな発見を目的とした、さらなる探究を行うための開かれた機会でもあった。TOTOギャラリー・間の要請は興味深いものだった。それは私たちの実践や作品だけ

次回
予告

増田信吾+大坪克亘展

独自性に富んだ建築作品を生み出している建築家ユニット、増田信吾+大坪克亘の展覧会と講演会を開催します。建築家の登竜門と呼ばれる「第32回吉岡賞」「AR Award 2014」大賞などを受賞し注目されている、若手建築家の初めての個展です。

会期
2020年1月16日(木)～3月22日(日)
講演会
2020年1月21日(火)／イイノホール



TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、展示替え期間
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY・MA

会期／2019年9月13日(金)～11月24日(日)

アーキテクテン・デ・ヴィルダー・
ヴィンク・タユー

architecten de vylder vinck taillieu



©Filip Dujardin

ヤン・デ・ヴィルダー(1968年生、写真中央)、インゲ・ヴィンク(73年生、同右)、ヨウ・タユー(71年生、同左)によって、2010年にベルギーのゲントで設立。明快な理論と豊かな感性が結びついた前衛的な作品で知られる。彼らにとって設計と教育は不可分な存在であり、現在はベルギーのルーヴェン・カトリック大学、スイス連邦工科大学ローザンス校(EPFL)、スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETH)にて教鞭をとる。18年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、新進気鋭の建築家へ贈られる銀獅子賞を受賞。



©Filip Dujardin

バルンハイムベーク

ベルギー・ゲント／2012



©Filip Dujardin

V Ai-exposition 展示風景
バルンハイムベーク模型

オーストリア・ドロンビルン／2012

でなく、思索と教育、さらにはADVVの独自で自由な発想や、私たちの拠点であるベルギー・フランダース地方のコンテクストや背景を含めて提示するというものだった。今回の展覧会で、ADVVは11の住宅プロジェクトを展示する。しかし、それだけではない。ADVVは、この住宅を表現としてだけでなく、東京工業大学とのワークショップを通して、学生と一緒に探究するに値する課題だと考えている。実際の住宅のコアとなるコンセプトを学生が読み解き、日本のコンテクストに置き換えたプロジェクトを考え、模型やドローイングを制作する。それらがオリジナルの模型の隣に展示される。これらふたつのバージョンの住宅を隣り合わせに展示することで、日本とフランダースという異なるコンテクストが明快に説明されるだろう。このアイデアは、今回の探求をより複層的にし、ADVVの作品だけでなく、フランダースと日本のコンテクストや文化の違いについても理解を深める機会となる。

本展示はTOTOギャラリー・間を出発点として、フランダース建築協会の招待により、20年にはアントワープのdeSingel Art Campusで巡回展が開催される予定である。探究は続く。フランダースで設計されたほかの建築家の住宅作品が展示に加えられ、その後、同じように世界のどこかで新しいコンテクストが追加され描き換えられていく。それはいつまでもつづく探究……終わりのない旅となる。

News File

TOTOの最新情報

COM-ETでの紹介例(タカシマヤゲートタワーモールの3階男子トイレ)。



2

TOTO News

「TOTO」の
商標が
50周年を
迎えました

TOTOは、1917年に「東洋陶器株式会社」という社名で創立して以来、時代に応じて想いを込めた、さまざまな商標を用いてきました。たとえば、1921年以降、衛生陶器商品の品質安定を機に世界に向けて羽ばたく想いを込めた大鷲のデザイン、1962年からは“東洋陶器”のイメージ強化を図り英字のデザインにしました。そして、1969年に一般に使用されることが多かった“東陶”という呼び方との整合を図り、遠くからでも見やすい現在の「TOTO」に変更しました。

今年で50周年を迎えた「TOTO」商標を、TOTOやTOTO商品への信頼の証として、今後もお愛顧くださるようお願い申し上げます。



1921～28年：地球を踏まえて羽ばたく大鷲のデザイン(初期)。

Toyotoki

1962～69年：すべての商品の商標を統一。小さい商品にも使用できる文字だけのデザイン。

TOTO

1969年～：デザインは、タイポグラフィの深野匡(ただす)氏(1929～91)。

1

TOTO News

「iFデザイン賞」を
6年連続で
「レッドドット・
デザイン賞」を
7年連続で受賞しました

台付シングル混合水栓「GMシリーズ」は、デザイン界で世界的に権威のある「iFデザイン賞」「レッドドット・デザイン賞」をダブル受賞しました。「iFデザイン賞」はウォシュレット一体形便器ネオレストAH/RHなど3商品が、「レッドドット・デザイン賞」は台付シングル混合水栓4シリーズが受賞しています。デザインと機能の高度な融合を目指した“ものづくり”が高く評価されました。

ダブル受賞した「GMシリーズ」。



reddot award 2019
winner



*各受賞結果はこちら
iFデザイン賞：ウォシュレット一体形便器ネオレストAH/RH、壁掛RP便器+ウォシュレットRX、台付シングル混合水栓GMシリーズ。
レッドドット・デザイン賞：台付シングル混合水栓ZAシリーズ、GMシリーズ、GEシリーズ、GCシリーズ。

4

TOTO News

建築専門家向けの
事例サイト
「COM-ET」を
リニューアルしました

「COM-ET」のウェブサイトは、TOTO商品が採用されたパブリック現場事例のデータライブラリーです。常時500件を超える最新事例からお探しの事例が検索しやすいように、建築用途・採用商品・配慮ポイント・物件情報など、条件指定での絞り込み検索機能を追加しました。また、内外観や水まわり空間のスチール写真紹介や動画により、物件イメージをリアルにお伝えできるほか、お気に入り一覧への事例情報のストックが可能になりました。より便利になった「COM-ET」の事例サイトをぜひご利用ください。

WEB: <https://jp.toto.com/com-et/jirei/index.htm>



COM-ETのロゴマーク。

3

TOTO News

ウォシュレットの
累計出荷台数が
5,000万台を
突破しました

2019年3月に「ウォシュレット」の累計出荷台数は5,000万台を突破しました。1980年6月に発売開始以来38年8カ月を経過し、年月とともに出荷台数を伸ばしてきました。

日本国内での温水洗浄便座の一般世帯普及率は80.2%(2018年)となり、日本の住宅ではあたりまえの設備になってきています。海外での販売も着実に進捗し、この10年で出荷台数は約5倍となりました。

各国・各地のニーズに合わせて「ウォシュレット」を進化させ、今後も快適で清潔なトイレ文化を国内外に広めていきます。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っていただくと
お役に立つ情報が心がけています。
合わせてご注目ください。

<https://jp.toto.com/publishing>

「TOTO通信」定期購読を
ご希望の建築家をご
紹介ください。

お申し込みはTOTO通信
データ管理室まで
*法人あての送付となります。

tel 093-563-2055

e-mail
toto_tsushin@jlink-net.com



アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

Bookshop TOTO 2F

所在地 東京都港区南青山
1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
電話 03(3402)1525
定休日 月曜日・祝日・
[TOTOギャラリー・間]
休館中の土曜日・
日曜日・夏期休暇・
年末年始

TOTO出版 2F

所在地 東京都港区南青山
1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
電話 03(3402)7138

全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでも
お求めになれます。書店遠隔の
方はお問い合わせください。

セラトレーディング B1・1F

所在地 東京都港区南青山
1-24-3
TOTO乃木坂ビル
電話 03(3402)7134
(東京ショールーム)
定休日 月曜日・祝日・
夏期休暇・年末年始

TOTO出版のお知らせ

1

Book

『建築のそれからにまつわる5本の映画 , and then: 5 films of 5 architectures』

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方
の中から、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。



建築家・中山英之設計の
5つの建物がたどった、建
築のそれから、and then
の時間をとらえた5つの映
像を、映画パンフレットのよ
うにまとめた建築作品集。
本書で紹介された映画が
鑑賞できるURL付き! 映
画『万引き家族』のツール
デザインでも知られる大島
依提亜によるブックデザイ

ンも魅力のひとつ。「2004」
「mitosaya 薬草園蒸留所」
「O邸」「弦と弧」「家と道」
を収録。

| | |
|----|-----------------------------|
| 著者 | 中山英之 |
| 定価 | 3,300円+税 |
| 体裁 | 182×257mm、ソフトカバー、 170ページ |
| 発行 | 2019年5月 |

2

Book

『共感・時間・建築』

第15回ヴェネチア・ビエン
ナーレ国際建築展日本館
で提示された日本の最前
線の実践は世界の共感を
呼び、特別表彰を受賞し
た。その展示によって開か
れた可能性を、多角的に検
証し、この先の建築を展望
する。山名善之・塚本由
晴・横文彦を迎え4人の若
手建築家と行ったディスカ

ッションと、縮小時代を生き
抜くヒントとなる7つのテキ
ストを収録。建築的知性を
アーカイブするTOTO建築
叢書シリーズ、第10弾。

| | |
|----|---|
| 著者 | 山名善之、塚本由晴=編著 横文彦、西田司、猪熊純、 能作文徳、伊藤暁=共著 |
| 定価 | 1,500円+税 |
| 体裁 | 128×188mm、ソフトカバー、 160ページ |
| 発行 | 2019年4月 |

セラトレーディングのお知らせ

細部まで こだわり抜いた 洗面キャビネット 「L-CUBE」を ラインアップしました

セラトレーディングでは、ドイ
ツ・Duravit (デュラビット)
社の洗面キャビネット
「L-CUBE (エルキュー
ブ)」シリーズをラインアップ
しています。

注目はトレンドの異素材ミ
ックス。インテリアデザイナー、
クリスチャン・ヴェルナーの
デザイン。Duravit社の高
い技術力で、陶器と木とい
う異なる特性の素材を接
着することでシームレスに
仕上がりました。無駄をそ
ぎ落としたミニマルな意匠
性で、インテリアのように魅
せる水まわりを検討してみ
ませんか。



L-CUBEシリーズ
洗面キャビネット
DV8004-11
希望小売価格:574,000円(税別)

当商品を掲載した「セラ総合カタログ
2018」はウェブサイト、またはファクスに
てご請求ください。
WEB: <https://www.cera.co.jp>
FAX: 03-3402-7185



台付シングル混合水栓
GMシリーズ



「iFデザイン賞」「reddotデザイン賞」ダブル受賞



台付シングル混合水栓
ZAシリーズ



台付シングル混合水栓
GEシリーズ



台付シングル混合水栓
GCシリーズ

4 products
win
reddot AWARD 2019



TOTO技術相談室 電話:0570-01-1010 受付時間:(平日)9:00~18:00 (土曜日)9:00~17:00 (日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)
建築専門家のための情報サイト COM-ET(コメント) www.com-et.com TOTOホームページ <https://jp.toto.com>

※商品詳細は、TOTOホームページをご覧ください

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙を、さらに印刷インクも大豆由来の植物性インクを使用しています。